

特 162

377

ASPECTS OF JESUS

Rev. C. Makita.

イエスの面影

牧田忠藏著

日本基督教興文協會



Price 20 Sen

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始





ASPECTS OF JESUS

Rev. C. Makita.



牧田忠藏著

イエスの面影

日本基督教興文協會



大正  
4. 3. 25  
内交



此書は、日本基督教興文協會より發行するものなり。而して本協會の事業は下文に定むる如し。

『基督教興文協會の事業は、日本の基督信徒及び未だ基督教を信ぜざる人々の需要に適したる基督教文學の著作及弘布にあり。本協會は日本に在る基督教ミツシヨンの同盟を代表せるが故に公同的精神を以て立てるものなり。されば本協會の會員及び維持者は必ずしも本協會に於て發行せる書籍に現はれたるすべての意見に同意せるものと認むべからず』。



# 目次

理想的な人格……………	山田寅之助……………	一頁
(一) イエスの小傳……………	牧田忠藏……………	一六
(二) イエスの自信……………	同……………	三二
(三) イエスの同情……………	同……………	四〇
(四) イエスの謙遜……………	同……………	五〇
(五) イエスの勇氣……………	同……………	五五
(六) イエスの直言……………	同……………	六六
(七) イエスの柔和……………	同……………	七二
(八) イエスの忍耐……………	同……………	八一
(九) イエスの無罪……………	同……………	九五



(十) イエスの純愛……………	牧田忠藏……………	九九
(十一) イエスの眞實……………	同……………	一〇三
(十二) イエスの沈黙……………	同……………	一一〇
(十三) イエスの勤勞……………	同……………	一一五
(十四) イエスの社交……………	同……………	一二四
(十五) イエスの信仰……………	同……………	一三一
(十六) イエスの祈禱……………	同……………	一三八

目次終

イエスの面影

牧田忠藏著

理想的人格

理想的人格とは如何なるものを云ひ、また之を判断するの標準は如何と云は、之に答ふること容易ならざれども、單に己が崇拜する人格なるが爲めに、之を理想的なりと云ふに止らず、何等かの根據を其人格中に發見するを得るであらう、換言せば崇拜と云ふが如き主觀的根據以外に客觀的根據を發見するを得るであらう、其客觀的根據なるもの、適否は別問題なるも、兎に角一定の客觀的根據のなかるべからざる事は明白である、如何なる人を理想的人格とするにも、斯る客觀的根據の



必要を見るのである。嘗て村上博士が釋迦を以て世界第一の聖人なりと論ずるに際して左の如く云ふた、「世に聖人と稱せられ、又豪傑と云はるゝ人も數々ある事であるが、如何なる人を呼んで聖人となすべきものであらうか、種々の方面より聖人の定め方もあらうけれども、何れにしても社會の表面に立つて、偉大なる事業を成し、又世界多數の人に尊敬せられ、歴史上に著大なる事蹟を遺したるものを聖人と云ふて然るべきやうに考へらるゝのである」と、この言に依れば、博士も釋迦を聖人中の聖人とするには、客觀的根據に依つたので、其客觀的根據と見たるものゝ適否は姑く措てその標準を客觀的根據に求めたのは、宜しきを得たものと云はねばならぬ。

博士はこの標準に基いて左の如くに結論した、曰「東洋西洋を問はず、古今を通じて社會の上に偉大なる事蹟を遺し、又社會に最多數なる人の

信用を惹きし者は誰なるかと問へば、何人も第一に釋迦を其人なりと答へねばならぬことであらう。孔子も其一人たるに相違ない、基督も其一人たるに相違ない、其他ソクラテース若くは支那の老子等數へ來れば宗教に學術に、又政治に軍事に付き、多くの人に尊敬せられ、社會に著大なる事業を遺せし人多けれども、釋迦ほどの人は恐らくあるまい」と、客觀的根據に基いて釋迦を世界第一の聖人即ち理想的人格なりと判断したる點に於ては、余は博士に一致するを得ざれども、其議論の形式だけは正當と視做さざるを得ぬ、博士が單に釋迦が貴いからとか、難有いからとか云ふ主觀的根據に基かずして客觀的根據に基いて断定したのは適當であるが、其客觀的根據として採用されたる事實其物が、果して釋迦を世界第一の聖人なりと斷言するに足るや否やと云ふ點に至つては、大に疑なきを得ぬのである、今其重きを置かれたる客觀的



根拠を擧ぐれば、佛教徒の最多數なりとの事である。基督教徒の數は新舊合して三億二千七百萬に達するを以て、釋迦は基督教以上の聖人なりとの事である。この統計は勿論信用するに呈らざるも、假りに一步も二歩も譲つて之を眞なりとするも、斯る事實に基いて釋迦を世界第一の聖人なりと斷言して安心するを得るであらうか、若し萬一基督教徒の數が佛教徒の數を凌駕するに至らば、此結論は如何になるであらう、勿論是は假定に過ぎざれども、斯る假定は決して事實となり得べからざる假定とは云へない、その時には釋迦は世界第一の聖人たる位地を基督教に譲らざるを得ざるに至るであらう、博士の議論の結果として自然に斯くならざるを得ざる次第である、人格は斯る薄弱なる根拠によりて判斷するべきものではない、世界を擧げて基督教徒となるも、基督教の人格は之が爲めに其價值を加ふる事がな

い、人格の價值は人格其物の中にありて、之を尊敬する人の多數にはないものである。

人格の價值は人格其物の中にありとは余の重きを置く所の點である、基督教徒の中にも、基督教が神なるが爲めに、又は神の子なるが爲めに、理想的な人格なりと云ふ人あれども、是は顛倒したる論法ではあるまいか、斯る論法の薄弱なるは、毫も村上博士の論法の薄弱なるに異ならぬ、基督教徒中には基督教を以て神なりとするものあれば、人間なりとするものもあるが、双方共に彼を以て理想的人格なりと視做して居る、基督教神にせよ、人にせよ、其人格はあるが儘の人格にして、人格の價值は人格そのものの中にのみ存するのである、之を神とするも、又は人とするも、基督教の人格の價值を毫厘も増減する事が出来ぬ、神と云ふも、人と云ふも、是れ單に名義上の差のみにして、實質に何等の相違も起ることがない。



余は基督の人格を以て理想的なりと云ふのは、孔子や釋迦よりも優れりとの意ではない、勿論劣れりとの意ではないが、優劣又は比較を離れて云ふのである。即ち凡ての人格中最大最高の人格なりとの意ではなくして、人格として我等の理想たるべき圓滿完全のものなりとの意である。比較的の價値にあらすして、絶對的の價値を基督の人格中に發見するを得るとの意である。けれども其絶對的の價値を十分に論述するが如きは、決して余の企て及ぶ所にあらざれば、僅かに其一斑を伺ふに過ぎぬのである。

余の目に映ずる基督の人格は圓滿完全にして人格美の極致とも云ふべきものである。其美は智情意の調和より出づる所の美にして、人格の完成より發する光輝とも見るべきものであらう。世には智の上より又は情意の上より見て、著しき發達を遂げたるもの少なからざれども、其

一部分の發達は専門家としては完全ならんも、人格の完成と云ふ立場より見る時には、不完全たるを免れぬ、其均齊を失へる點より云へば、人格美を具へたるものとは云へぬ。カントは大哲學者にして、獨逸民族の誇りたるに止らず、人類の誇りたれども、彼は唯其智力の上より偉大なるのみにて、人格の完成より云へば、缺點あるを免れぬ、或人彼を評して曰く「北海の濱に一怪物あり、人物なるか否人物と云はんよりも寧ろ化石したる主義と云ふの優れるに如かず、之を稱してエムマヌエルカントと云ふ、自稱して批判と名づくこの抽象物は六十歳の久しき人と交際を絶ち、定時に外出するも誰とも語ることもなく、殆んど鐵の柱の外出するが如し」と、カントの大學者たるは疑ふの餘地あらざれども、唯知識の一方に偏したるが爲めに、完全なる人格とは云ひ難い、吾人は學者として彼に學ぶ處あれども、之を理想的人格として崇拜する事が出来ぬ、彼



は偉大なる人物なれども、一方に偏したる大人物たるを免れぬ、智にせよ、情意にせよ、一方に偏するものは人格として不完全である、マリオン  
 の言に「感情の優勢を占むる時は、若し理性と一致せざる場合には、善を行ふに少なからず妨礙となるものなり、勢を倍加するが故に、之を善に用ひざれば必ず之を悪に用ゆるに至り、勢力の迸る所止むを得ざるこ  
 とあり、蓋し中庸に位するを知らず、感情の人は善惡何れにか傾き其善に傾くは甚だ可なるが如しといへども、善の中庸に立つこと能はずして必ず極端に走るに至る」とある、理性と調和せる感情は人格美の要素なれども、理性の支配を脱したる感情の危険なるは、脱線したる瀛車の如きで、尙其上に人格美を害すること多大なりと云はざるを得ぬ。  
 然らば意志に偏したる人は、ごんなものかと云ふに是れも亦智や情に偏したる人の如くに危険に陥るの憂あるを免れぬ、或學者の意志の弊

に就て云つてをる言に「單に健強なる意志の力のみにては危険あるを免れず、知識の指導に依らずんば動もすれば頑固に陥り易し、頑固は人生の大弊なり、何となれば、理義の燈明臺を仰がずして、人生の船を屢情波慾濤の中に沈没せしむることあればなり」とある、斯の如く、智情意の三者調和を失ふ時には、人格は決して其完全を期することが出来ぬのである、佛敎も基督敎も人格の圓滿を理想とするの點に於ては一致して居る、佛者の言に「自己の本性を明かにし、其本性に具有する知徳を圓滿に發揚すること、是れ佛敎の最大眼目である、平たく云へば、智の方面よりは轉迷開悟情の方面よりは離苦得樂意の方面よりは止惡作善是れ佛敎の最大目的なり」とある、基督敎に於ても神を知り、之を愛し、其誠を守ることに重きを置くは是れ取りも直さず智情意の圓滿を理想とする事に外ならぬ、この圓滿を我等は基督の人格に見ることが出来る



のである。

基督の人格の理想的なる所以を明かにせんとするには、智情意の上より少しく其人格を観察するの必要がある。我等は其人格中に彼を崇拜する所以の客観的根拠を發見するのである。基督はカントの如き哲學者でもなければ、ニュートンの如き科學者でもない。或人は彼を指して無學の一野人に外ならぬと云ふて居る。基督は或る意義に於ては確かに無學であらう。二十世紀の大學教授に適應する點に於ては無學であらう。ライマン・アポットが基督を指して「其智識に於てはプラトリーに及ばず」と云ふたのは事實であらう。けれども彼は智識の本源を知つて居る。何人も知らざる宇宙の大本源を知つて居る。プラトリーの教ふることの出來ざる神を教へた。未だ神を見し人あらず。惟うみ給へる獨子すなはち父の懷にあるものゝみ之を彰せり。』(約一〇十八) 古來預言者を出し

たる事の多きユダヤ國の右に出づるものがあるまい。然るに其多くの預言者中基督の如くに宇宙の本源、真理の源泉たる神に就て明かなる知識を持てるものがあらうか。彼の神を教ふるや、明瞭確實にして毫厘も疑はしき所がない。彼が神を推論したるにはあらで、實見したのである。『恐くは然らんか』と云ふが如き曖昧なる言語を用ゐずして「我實に爾曹に告ん」と斷言して居る。彼は己が人格に由りて神を翻譯し、「我を見しものは神を見しなり」と公言した。神を明かに己が身に體認したるものにあらざる以上は、斯る大膽なる語を發する事が出來ぬであらう。神に關するの知識は萬有に關する一切の智識の根底である。この意味に於て眞に神を知れるものは、すべての事を知れるものである。彼は眞理の本源より吸取りたる水を人間に飲ませたる點に於て、如何なる聖人に優つて居る。彼は神を知れるが故に、また人間をも知つた。人間の眞價



を知りたる點に於て、彼に優れる人があらうか、「人もし死ば亦た生くべき乎」とはヨブの疑問なれども是れは人類一般の疑問である、この疑問に對して數多の預言者は明白なる解答を與へない、孔子は「未だ生を知らず焉んぞ死を知らん」と云ふて死後の問題には一指をも觸れなかつた、多くの聖賢に取つては來世は疑問なれども、基督に取りては是は疑問ではなくして、眼前の事物を見るが如くに明かである、人間の價値について「もし人全世界を得とも其生命を失はば何の益あらんや、また人何を以て其生命に易んや」と太十六〇廿六と云ひ、來世に就ては「凡て生きて我を信するものは永遠も死ることなし」(約十一〇廿六)と云ひ、また「我父の家には第宅おほし」(約十四〇二)と云ふた、大問題に關する斯る大膽なる斷定は、決してこの世の所謂哲學者や科學者の到底下す事の出來ざるを思はば、基督は其知識の點に於て、如何に卓越したるかを知り

得るであらう、「智慧と知識の蓄積は一切キリストに藏れある也」(西二〇三)とはこの意に外ならぬ、基督は智の人であるが如くに情の人である、智の人としては眞理を重んじ、遂に眞理と同化して、「我は眞理なり」と云ふに至つた、彼がピラトの面前に立つて「爾は王なるか」との問に答へて、「我は王なり我これが爲に生これが爲に世に臨れりそは眞理について證をなさんためなりすべて眞理に屬者は我聲をきく」(約十八〇三七)と云ふた、彼は情の人としては愛を重んじた、愛神愛人は彼の教の大眼目にして、人心の一切の活動中心となるべきものは愛である、神を愛し、人を愛し、敵までも之を愛するは彼の主義にして、天下愛するに足らざるものなく、愛を以て世界を征服し、地上に愛の王國を建設するは彼の理想である、「人その友の爲に己の命をすつるは此より大なる愛はなし」(約十五〇十三)と云ひて、自ら其生命を捐て人類を愛し給ふた、彼は神の愛



を説きたるのみならず自ら其愛を實行して人類に模範を與へ愛の化身として人類の精神上に多大の感化を及ぼして居る。

基督が情の人たることは、悲哀の人と呼ばれたるに依りても知らるゝのである。彼は唯ラザロの墓畔に涙を流し給へるのみならず、人類の爲めに涙を流し給ふたのである。彼は亦同情の人と呼ばれて居る。そして彼の救主たるを得るも亦この同情心に因るのである。彼はこの同情に依りて罪人の友となつた。彼の語り給へる善きサマリア人の比喩の如き、又放蕩子息の比喩の如きは、情の溢れて流れ出づる比喩にして、其中に描き出されたるサマリア人は基督自身にして、放蕩子息を歓迎したる父親が基督自身の心に映じたる天父に外ならぬ。基督自身愛の權化にあらずんば到底是等の比喩を語るは不可能である。

彼はまた意の人である。當時の宗教家を敵として奮闘をつゞけ、遂に十

字架の死をどげたるが如きは、意の人にあらずんば爲し能はざる所である。四十日の間野にありて悪魔と奮闘したる彼の態度を見よ、僞善者を叱咤したる彼の勇氣を見よ、またピラトの法庭に立つて「我は王なり」と答へたる大膽を見よ、彼の意は鐵である、意志の堅固なるを以て諸國民に卓越したるローマ人の意志も、彼の意志に比すれば鉛同様である。十字架は彼の智情意の表象にして、其人格の記號に外ならぬ。彼は吾人の救主なると同時に理想である。彼は最高の理想である。品格を作らんとて吾人の心に宿り給ふ理想である。彼は人となりたる神である。彼の面には神の榮光が輝いて居る。この榮光は人類全體を照らす所の光である。(山田寅之助)



(一) イエスの小傳

私共人類にとりまして最も紀念すべき又幸福でありました日はイエスが神の獨子、人類の王として此世に生れ給ひし日に過るものはありません。何せかと申しますれば人類の救済は此日に於て始まりました罪に縛められて居ました人は此日解放の聲を聞きました。此日は實に自由の生れし日、新生命と光明とが世に臨んだ日であるのであります。

此紀念すべき幸福の日は何年何月何日でありましたか私共は確實に知ることが出来ません。けれども學者の研究に憑りますれば羅馬の建國七百四十九年即ち西曆紀元前五年に當ると申すことであり、そして月日は五月二十日と云ふ人もありますが一般に十二月二十五日を以て

て新紀元的第一天と定められて居ります。

然らばイエスは誰の子として御生れになりましたかと申しまするに、當時羅馬の屬邦でありましたパレスタイン國ガリラヤの邑ナザレの一木匠ヨセフを父とし、マリアを母として、ユダヤの邑ベツレヘムのある客舎の庭の一隅である、旅客の家畜の溜場に於て呱呱の聲を揚げ、馬槽の中に臥さしめられ給ひました。それは客舎に彼等の居處なかりしが故路加傳二であり、何故斯かるみじめな有様の下に御誕生になつたかと申しますと、其頃天下の戸籍を査ぶる詔路加傳二が出ました。然るに其國の習慣に依れば、人民は現住地を去り、本籍地で調査を受けねばなりません。それでヨセフ夫妻は今こそ一個の卑しき平民であります。元來國王の血統に屬して居りまして、其故郷はユダヤの邑ベツレヘムであつたのでありますから、ナザレから殆んど百哩を旅行して



来ました。然るにマリアは妊娠の身でありまして死るばかりに疲れを  
 覚え、急に産気づきて出産するに至りました次第であります。  
 斯の如きものは、實にイエスの誕生の實際であります。誰か此馬槽に  
 安眠して居る嬰兒が、人類の救主、自由の附與者、新生命を與ふるものであ  
 ると思ふものがありまじやう。然し之を知るものは、知て居ました。即ち  
 ベツレヘム附近の野に居りました素朴愛すべき牧羊者の一群は、神の  
 啓示を受け、急ぎ來りて、嬰兒に尋ね遇ひ（路加傳二章十六節）神を崇め、且讚美（路加傳二  
 章二節）たと云ふことであり、是より先き、牧羊者等が野に於て羊の群  
 を守りて居りました時、衆の天軍あらはれ、天使と共に天上どころには、榮  
 光神にあれ、地には平和、人には恩澤あれ（路加傳二章十四節）と神を讚美したと申  
 します。實にイエスの誕生に相應しきこと、申さねばなりません。其後  
 東方の三人の博士は、星に依り、救主の誕生を知り、態々ベツレヘムに來

りて、嬰兒を拜し、寶の盒を開きて、黄金、乳香、沒藥など、禮物を献げ（馬太傳二  
 章十一節）ました。蓋しこれ世の學者、富者、乃至權威ある者と雖も、イエスの前にひ  
 れふすべきものとの暗示と見ることが出來ます。  
 禍福は、絢る繩の如しと申します。イエスは生れ給ふてから、牧羊者の一  
 群、東方の博士、其他二三の人から、祝福を受けて、平和の日を送り給ひま  
 したが、それは、全く束の間でありまして、今や恐るべき迫害の巨手は、嬰  
 兒なるイエスの上に下りました。それは、ユダヤの暴王ヘロデが、イエス  
 の誕生は、自己の王位を危うするものであるとの杞憂から、ベツレヘム  
 と其境の内なる二歳以下の嬰兒を、盡く殺した（馬太傳二章十六節）のであります。  
 けれども、イエスは神の啓示に依り、ヨセフに携へられて、エジプトの地  
 に避難し、事なきを得給ひました。イエスの苦難の生涯は、此に其前兆が  
 あると申しても、差支はありません。



エジプトの流離は僅少の月日でありました。イエスの生命を求めて居ましたヘロデ王死去の報知を得て、ヨセフはイエスと其母マリアを伴れて再びバレスタインに歸りました。けれどもアケラフ父ヘロデに代りてユダヤの王たりと聞きければ彼處に往くことを懼れ……ガリラヤの内へ逃げナザレと云へる邑に至りて馬太傳二章二十三節居住すると云ふことになりました。これイエスがナザレ人と呼ばれ給ふ所以であります。

ナザレ邑はナタナエルが「ナザレより何の善者いでんや」約翰一章四十六節と輕蔑しましたやうに、當時では人に知られて居なかつた地でありました。けれどもガリラヤはバレステナ中最も風景の善美な地方で、ナザレも亦其一つであります。山田寅之助氏は「ナザレの丘陵より眺むる四邊の風光は旅人の歎賞して措ざる程の壯觀を極めて居る。北には千古の雪を

戴くヘルモン山の高く青空に聳ゆるあり、東には明媚なるガリラヤ湖を眺め、更に湖水を隔て、バシヤンの山脈々々として北より南に走り、其前面にテポール山の恰も大伽藍の如くに屹立するあり、東南には小ヘルモンとギルボアの山聳え、南にはエストラロンの大平原開展し、其南端の境を作れるものはサマリアの諸山である。目を西に轉すればカルメルの山脈西に伸びて突然海に入るの光景を見る事が出来る。此眺望はバレステナ中最大最美のものにして……イエスは此最も美しき廣濶雄大な自然の中において、義人なる父ヨセフに薰陶せられ、貞淑なる母マリアに愛育せられて成長なさいました。イエスの性格が恰もナザレの此雄大な光景に酷似し、又一面博愛仁慈、剛直正義であり給ふのは所以あることであります。けれどもイエス十二歳の時エルサレムに上り給ひし一事實と「イエス智慧も齡も彌増り神と人とに益々愛



せられたり路加傳二章の一句の外三十歳に達し給ふまでの一切を知ることは全く私共に秘せられて居ります。傳説に依ればイエス十四歳の時父ヨセフが死亡しましたので、爾來父の後を繼ぎて木匠を業とし、母及び弟妹等を扶養し給ふたと申すことでもあります。聖書に「彼は木匠に非ずや」馬可傳六とありますが、これは其最も善き證左であらうと思ひます。

春風秋雨此に三十歳、イエスは其間ナザレの閑村にて家業に従事し、母に孝養をお盡しになつて居りました。其頃ヨハネと稱する預言者がヨルダン河畔に現はれまして、教を垂れましたが、全國舉りて其許に集ると云ふ勢でありました。イエスは己が起つべき時節正に到來したと悟り、母の家を辭して先づヨハネを訪れ給ひました。それはバプテスマを受んためであります。然るにヨハネは我は其履帯を解くも足らざる卑

しきものであると固辭したのであるが路可傳三イエスは暫く許せ如此凡ての義き事は我等盡すべきなり馬太傳三と云てバプテスマを受け給ひ、水から上り給ふ時、天忽ち之が爲にひらけ、神の靈の鴿の如く降りて其上に來るを見、又天より聲ありて、此は我心に適ふわが愛子なり馬太傳三との聲を聞き給ひました。これはイエスが救主たる自覺を得給ふたことを示して居ります。此後間もなくイエスは救主的活動と其方法に就て解決するの必要を感じ、人跡稀なるユダヤの荒野に入り給ひました。此期間は四十日四十夜馬太傳四でありましたが、飲むことも食ふこともなし給はなかつたと傳へられて居ります。そして幾多の誘惑に出會ひ給ひました。馬太傳第四章にある有名な「野の誘惑」は此時にあつたのであります。イエスはそれらの誘惑を悉く退け、遂に戦勝者としてユダヤの荒野を出で給ひました。



誘惑の野を去り給ひしイエスはヨルダン河畔に歸り、數人の弟子を得てガリラヤに至り、傳道を始め、期は満り、神の國は近づけり、汝等悔改めて福音を信せよ馬可傳一章十五節と獅子吼し給ふたのであります。爾來イエスはガリラヤ湖の北西岸にあるカペナウムに居を定め、此地を以てガリラヤ傳道の中心とし給ひました。蓋し此地の位置は湖水附近の活動生活の焼點でありまして、四境の郡村に至るの便利を有し、従つて何の事件たるを問はず、周囲の地方に傳播するに利益ある地であるからであります。斯して或時は遠く西の方内地に入り、時としては湖畔の諸村及び湖水の東方にある地方を訪問すると云ふ有様にてガリラヤの諸村を歴遊し給ふて、恩寵と眞理の福音を群衆の耳に又は獨り憂ひを懐いて來る人の耳に語り、或は盲者の眼を開き、跛者の足を直くし、癩病人を潔めるなどの活動をなし給ひましたので、其名聲四方に轟き、日々教を

聞くもの、數を増しましてイエスの到り給ふ所には千萬を以て數ふる群衆が追隨するやうになつたのであります。ですから食する暇も無かりし馬可傳六章三十一節ことが數次あつたのであります。月に叢雲花に嵐どかく好事には魔が多いものであります。イエスのガリラヤに於る盛なる、しかも光榮ある活動は一年の終りに於て豫期し給はなかつた結果を來たしました。即ち最初の賞讃と感謝の叫びは變じて呪咀と誹謗の聲となりました。ご申しますのは群衆がイエスの門地の低きと弟子等の多くは無學の平民であつたのに躓きましたのご、イエスが當時の宗教家學者輩よりも數等高い思想を有し給ひまして、いつでも彼等の誤れる考を痛撃し給ふと共に其主義主張の當然の結果として當時行はれて居ました種々なる舊習慣例に反對し給ふたからであります。當時カペナウムの人々が如何に激烈に反對したかご云



ふことは、イエスが天にまで擧られしカペナウムよ又陰府に落さるべし馬太傳十一と云ひ給ひし一言で、いも知れましやう。  
 斯てイエスは六ヶ月ばかりをエルサレムにて費し、後再びガリラヤに歸り給ふや弟子等を伴ふてバレスタインの邊陲であるツロシドン又はカイザリヤビリビなどに行き、説教も奇蹟も餘りなし給はず専ら弟子等の教養をなし給ひました。而してイエスは此旅行に於て弟子等に対し、多くの苦難をうけ長老祭司長學者どもに棄られ且つ殺され馬太傳八章三十一節。ることなどを告て、自己の一大決心を示し、奮然としてエルサレム行の途に就き給ひました。此行六箇月を要されたのであります。が、實は此行はイエスが一般民衆から來るべき救主として認識せられ給ふか、但しは死を招き給ふかの岐れる所であるのであります。  
 弟子驢馬の子をイエスに牽きたりて己が衣を其上に置ければイエス

それに乘れり馬可傳十と聖書にありますやうに、イエスは平和の王として極めて平和に關係ある驢馬に跨りて威風堂々エルサレムに入り給ひました。時は恰も逾越節の少し前でありまして、地方から一群又一團とエルサレムに上り來るもの其數幾百萬を以て數ふる程であります。それでイエスに味方する一群の群衆は前にゆき、後に從ひまして「ホザナよ主の名に託りて來る者は福なり、主の名に託りて來る我等の父なるダビデの國は福なり至上處にホザナよ馬可傳十一と歡呼して迎へました。其叫びは甲から乙と益々高くなりまして、愈々人々の感情をもやし、エルサレムは湧が如き状態となりました。がイエスの所謂受難週と稱するものは此から始まるのであります。  
 イエスのエルサレム入城は自己が約束せられて居た救主であるこの公表をなし給ふにありました。それで其第一着手として當時最も神聖



であるべき神殿が甚だしく祭司等に依て汚されて居ましたからイエスは公憤を發して神殿潔を斷行し給ひました。而してこれが端緒となりましてイエスは全週を一貫して祭司即ち宗教家學者輩と一大論戰を繼續し、其眞面目を發揮し給ひました。けれどもイエスが宗教家學者輩をやり込め給ふだけイエスの生命は危殆に陥るのであります。即ち反對の氣勢愈々高く祭司の長學者たち如何してかイエスを殺さんと窺ふ二章加傳二十やうになりました。加之反對は外部からのみでなく、内部にもありました。それは申すまでもなく久しく世俗的權勢に憧憬て居ました所の十二弟子の一人イスカリオテのユダが前途の希望の影暗き所から謀反を企て、宗教家や學者輩に内應してイエスを賣たことでもあります。其結果イエスは遂にゲツセマネの園に於て捕縛せられ給ひました。

夜半ユダに導かれました一隊の神殿の守兵と、宗教家、學者輩から遣はされた暴民等に捕縛せられ給ひしイエスは、即刻祭司の長カヤバの邸宅に引立てられて審問を受け給ひました。聖書に祭司の長および議員みなイエスを殺さんとして證を求むれども得ず馬可傳十四とありませやうに、祭司等は種々偽證を提出したのであります。けれども、死罪に相當する何等の證據を得ることが出来ませんでした。此に於て祭司の長は「汝は願べき者の子キリストなるか」馬可傳十四と肉迫しました。然りと答へ給へば死罪に處する善き口實を得せしめることは明白であります。が、イエスは大膽にしかも嚴然として「然り人の子大權の右に坐し、天の雲の中に現はれ来るを汝等見るべし」馬可傳十四と云て、神の子救主であることを宣言し給ひました。果然祭司の長は大に怒り、他に證を求むるの必要はない、此褻瀆ことを云ひし一事正に死に當るものであると



申しましてイエスを死罪に定めました。

代官ピラトもイエスを審問しましたが、臆病なピラトは自己を救ふてイエスを十字架に附することに同意したのであります。斯してイエスはエルサレム城外ゴルゴダと稱する石地の丘に於て二人の盜賊かれ(イエス)と共に一人は其右一人は其左に十字架に釘られたり。馬可傳十五章とありますやうに、イエスは悪罵嘲笑の中に盜賊と一緒に盜賊の如く磔刑せられ給ひました。これ實に紀元後二十八年ニサンの月四月十四日。イエス三十三歳の時であります。

ある人類の救主、自由と生命の附與者であるイエスは、遂に救主として認められ給はず、却つて神を褻瀆するものとして死に給ひました。されど三日目に甦り、後天に昇り給ひしイエスは、今も私共の救主として私共を助け、導き、護り、愛し給ふことを思ふ時、私共は歡喜と感謝の情に溢るるものであります。

われ汝に問はんイエスの性格は歴史の上に於て最も非常なることにして全く人性の理を以て説明しがたきにあらずや。我のキリストを崇むるの深きは實に神を仰ぐの崇敬に次ぐのみ。イエスの性格は實在にして神の愛子に屬し、又其愛子たるを顯はすものなり。イエスの行實は神史演劇のごときにあらず、キリストは今尚ほ神の子にして世の救主たるなり。 チャンニンケ



(二) イエスの自信

世の中には他人の批評を氣にして戦々競々何事も控へ目にする人があります。けれども他人の批評は必ずしも當になるものではありません。御覽なさい充分人から信せらるべき人でありながら疑はれて居ることもあれば、兎角の批評のあるものが却つて信せられ用ゐられて居る事實があるではありませんか。其當にならぬ他人の批評を氣にして煩悶懊惱すると云ふのは畢竟其人に自己に對する信用がないからであります。とは云へ自己に對する信用即ち自信は甚だ持難きものでありまして孔子ほどの聖者でさへ陳蔡にありて七日の間食を絶ち、從者何れも疾病に犯され進退谷まつた時慨然として「吾道非なるかなんすれぞ此に至るや」との歎聲を發したのであります。又絶世の英傑ナポレ

オンも其一度セントヘレナの孤島に流さるゝや、己が建設した帝國が再び榮ゆるの時なきを思ふて深く歎息したのであります。以て自信を持つと云ふことが如何に困難であるかを知ることが出来まじやう。イエスの品性は何れも偉大であります。自信も確かに其一つであります。イエスの言葉の中に「天地は廢せん、然れど我言はうせじ」(馬太傳二十五節)と云ふのがあり、又「我既に世に勝てり」(約翰傳十六節)と云ふのがあります。此等の言は共に一方に敵がイエスの生命を奪はずんば止まずとし、益々イエスに肉迫し、他方には親兄弟に見棄られ、人民に見離され、力とせし弟子等にすら裏切りせられ、逃げられんとして、外面より觀れば眞に孤城落日の状態にあつた時、換言すれば敵の手に殺さるゝを豫期し、而して其時の刻一刻と迫りつゝあつた時に發せられたものであります。何と驚くべきではありませんか。之を陳蔡の野に於る聖者孔子の



言セントヘレナに於る英傑ナポレオンの述懐に比べますならば天地  
霄壤の差があると申しても決して過言ではありません。抑も自信とは自己に對する信用であり、而して自信には必ず權威  
が伴ひます。又自信のある所には希望が存するのであります。今少しく  
イエスの權威と希望とを記してイエスの自信が如何に強く固きもの  
であつたかを究めて見ましやう。

(一) 權威 聖書を見まして著しく目につきますのはイエスの傳道的  
態度が如何にもすばらしいもので殆ど傍若無人に近いことでありま  
す。先づイエスは「我は途なり真なり生命なり」(約翰傳十 四章六節)と云ひ、又「ラビの  
稱を受けること勿れ蓋なんちの師は一人即ちキリストなり」(又導  
師の稱を受けること勿れ蓋なんちの導師は一人即ちキリストなり) (馬太  
十三章 十節) と喝破して自ら絶對の師たることを主張し給ひました。従つて

古來大王としてユダヤ人が尊んで居ましたソロモンに對しても、ソロ  
モンより大なるもの此にあり(馬太傳十二 章四十二節)と云ひ、又預言者として崇めら  
れて居ましたヨナに對しても、ヨナより大なる者こゝにあり(馬太傳十二 節  
と稱して自らを推薦し、又ユダヤ教の開祖として、律法の編纂者として  
ユダヤ人の歸依尊崇を受けて居ましたモーセに對しても、モーセは斯  
く斯く云た「されど我なんちらに告ん」(馬太傳五章二十二節、二十三節)と云て自ら  
をモーセ以上に置き給ふたのであります。既に自ら絶對の師であること  
確信し給へるイエスが、世人に對し我に従へ」と要求し給ふのは當然の  
ことであります。さればこそイエスは「我軛を負ふて我に學へ」(馬太傳十一 章  
どか「日々その十字架を負ふて我に従へ」(馬可傳八章 三十四節)と云ひ、  
嚴命を下し給  
ふのであります。イエスの教を聞きましたものが「學者の如くならず、權  
威を持てるもの、如く教へ給へり」(馬可傳一章 二十二節)と云ひ、未だ斯くの如く云



ひし人あらず〔約翰傳七章と申しまして何れも其權威に驚いたのは決して怪むに足りません。〕

(二) 希望 イエスの生涯は實に不遇であつたと云ふことが出来ます。旅宿の馬小屋の馬槽の中にわびしき誕生をなされたるさへあります上に、生れ給ふと間もなく悪虐非道のヘロデの兇手に罹らんとし給ひ、漸やく其難を免れて片田舎ナザレの賤が伏屋にわびしき少年時代を送り、そして十四五歳の時には既に父を亡して一家の責任を其弱き双肩に擔ひ給ふたと云ふことはしばらく云はないとしまして、三年に足らない公生涯に就て見ましても、イエスは不遇の一生を送り給ふたのであります。尤も年三十にしてヨルダン河でヨハネからバプテスマを受け、野の試誘を経出で、カペナウムに獅子吼し給ふや、之に應ずるものは雲の如く所在に起つたと云ふ所謂イエス得意の時代もなかつ

たではありませぬ。けれどもそれは暫時のことでありまして、後にはイエスの説教に反對し、奇跡は悪鬼の力を借りるものだと云て妨害し、何か批難の口實を得やうとの心から、二人三人を尾行させる有様でありました。イエスが狐は穴あり空の鳥は巢あり然ども人の子は枕する所なし〔路加傳九章と云ひ給へる所を見ますれば、住居にさへ困難し給ふたこと、察せられるのであります。人生悲哀多しと申しましても社會から顧みられぬに勝る悲哀はありますまい。それでも家族の一人が同情して呉れますならば尙ほ城を覆へすの勇氣を有つことが出来ます。然るにイエスは社會からは全く棄てられ、腹心の弟子等には主義精神を誤解せられ、其上家族からは狂人の取扱をせられて、全く孤獨の境遇に陥り給ひました。のみならず身は遂に不法の手に捕へられ、非道の審判の結果、ゴルゴタ山上に磔殺され給ふたのであります。〕 どうしてイエス



を稱して成功の人と云ひ、多幸の人と稱し、順境の人と申すことが出来  
 ましやう、寧ろ殆ど成功の證跡とすべきものは一つも見ることが出来  
 ないのであります。けれどもイエスは失望し給ひません、其不遇を一た  
 びだに歎じ給ひません、のみならず却て時まさに至らん今いたりぬ、汝  
 等散て各人その屬する所に往たい、我を一人のこさん然ぞ我獨をるに  
 非ず、父われと偕に在なり、〔約翰傳十六と云て〕綽々たる餘裕を示し、又汝等  
 世に在ては患難を受ん然ぞ懼るゝ勿れ、我すでに世に勝り、〔約翰傳十六と  
 稱して自ら大勝利大成功を贏ち得ることを信じて疑ひ給はなかつた  
 のであります。加之イエスは自己の事業が必ず未終に成就することに  
 就ては萬民を引きて我に來らせん、〔約翰傳十二と斷言し、又天國の此福音  
 を萬民に證せん爲め普く天下に宣傳へられん、〔馬太傳二十と公言し給ひ  
 ました。實にイエスは其死に依て家族を失望せしめ、社會の人を失望せ

しめ、弟子等を失望せしめ給ひましたが、獨り自らは満々たる希望に輝  
 いて居り給ふたのであります。

キリストは今日も尙ほ別種の人なり、されど之を種族を同じうすべ  
 きものゝ他に有るにあらず、實に獨り自らにして一種族をなせり、世  
 には之が比倫なきのみならず之に近寄るべき者もあらざるべし、イ  
 エスは類似したる衆星のうちにて、光輝の一際目立ちたるものにあ  
 らず、實に獨り太陽の地位を專有するものにて、其光線に遭へば衆星  
 悉く色を失ふ。

ビーボデー



イエスは十二弟子と共に逾越節の六日前、ベタニアと云ふ邑のラザロの家に行き給ひました。其節ラザロの家では晚餐を設けてイエスの一行を犒ふたのでありますが、ラザロの姉妹マリアは貴きナルドの香油をイエスの足に塗り、其足を己が頭の髪で拭ひました所が弟子の一人なるイスカリオテのユダは何ぞて此香油を銀三百に鬻ぎて貧しき者に施さるやと不平を申したのであります。イエスはそれに對して彼を容しおけ……：全世界中凡そ我教の宣傳へらるゝ處には彼がなせる所の事も記念として稱へられるであらうと答へ給ひました。世に麗はしき行爲は同情であります。而して此同情は死せる人を復活せしめ、倒れたる人を起して其徳は永遠に消ゆることがありません。

## (三) イエスの同情

ナポレオンはエジプト遠征の際、炎威激甚の爲め將卒の倒るゝもの多くあつた時、先んじて馬を下り、疲れし者、病める者をして馬に乗らしめ、温言を以て或は慰め、或は勵ましたと申しまして人々はナポレオンの同情を讚美致します。けれどもイエスの同情と比較しましたならば如何でしやう、其動機一つだけでも雲泥の差があります。即ちナポレオンの同情は自己の爲めであるに反してイエスのそれはポーロもそれ義人の爲に死するもの殆ど少なり仁者の爲には死することを厭ざる者もや有ん、然ぞキリストは我等のなほ罪人たる時われらの爲に死たまへり」(羅馬書五章七八節)と申して居りますやうに全く他人の爲でありました。或人が同情あるナポレオンも之をイエスの前に立たしむれば其履の紐を解にも足らぬと申しましたが全く其通りであります。イエス三十年の私生涯は漠として判然しません。故に三年に足らぬ公



生涯に就て見ますれば、イエスの生涯は同情に始まりて同情に終りて居ると云ふことが出来ます。先づナザレの閑居を後にしてヨルダン河畔に出現し給ふたのは同胞の凡てが「牧者なき羊の如く精神的に滅亡し行く有様を見るに堪へず、之を救はんとして自らを投げ出し給ふた大なる同情の發現ではありませんか。病者を癒し給ふたのも、狂人を救ひ給ふたのも、死せる人を復活せしめ給ふたのも、人々を教訓し指導し給ふたのも決して自己の力を顯はす爲ではありません。又決して自己を利益せんとし給ふたのでもありません。却て其人々を憫み馬可傳十章斯かる人々を助け給ふたのでありまして何れも同情の發露であります。或人々はイエスのゴルゴタ山上に於る十字架上の死は、四圍の形勢の然らしめたものでイエスの失敗を示して居ると申します。けれどもイエスは劔や棒を持た群衆がイエスを捕へに來た時、弟子のペテロが

劔を以て大祭司の僕の耳を斬り落しました。其節、汝の劔を其鞘に收めよと云ひ、更に「我いま十二軍餘の天使を吾父に請ふて受ること能はず」と汝等おもふや馬太傳二十六章五十三節と申されて居ります。やうとなされば幾らも道はあつたのであります。が自ら其身を與へ給ふたのでありまして「我往は汝等の益なり若ゆかずば訓慰師なんぢらに來らし」約翰傳十章七節とのイエスの言葉は其證據であります。即ちイエスの十字架上の死は全く私共人類を救はんとの同情の結果であつたのであります。同情には深淺廣狹と名づけらるゝ程度があります。イエスの同情は勿論深い、廣い、大きなものでありましたが、之を適切に言ひ表はさんとするれば徹底的であつたと云へると思ひます。今左に一二の例を示して見ましやう。



(一) イエスがエルサレムに於て乞巧なる生れながらの盲者の眼を醫し給ひました時に、圖らず或人は「彼なり」と云ひ、或人は「似たる者なり」と稱して其出來事に就て争ひが起つたのであります。そして或人は盲者であつた乞巧に直接に問合すると云ふ滑稽もありましたが、結局「我は彼なり」と云ふ盲者の自己紹介に依てそれに相違ないと云ふことに收りがつきました。然るに今度は「汝の眼は如何にして啓たるや」と云ふことになりまして、盲者であつた乞巧は「イエスと云ふ人士を和わが眼に塗て云ふシロアムの池に往て洗へ」と我ゆきて洗ひければ眼見ることを得たり」と答へました。容易ならぬ出來事であり、ますからイエスの反對家パリサイの徒は兩親を招いたり何かして、飽までそれを否定せしめんとしましたので、盲者であつた乞巧との間に大争論が始まり、その結局パリサイの徒は大に怒り盲者であつた乞巧をユダヤ教から破

門したのであります。此破門と云ふことは國外に放逐されると同様の苦痛であります。そこでイエスは此事を聞き給ふや、盲者であつた乞巧の住所を彼處此處尋ね廻りて漸やく探し出し、神の子を信する乎と云て自らを御示しになり、而して其逢へる不幸に同情をし、之を慰め、之を勵まし給ふたのであります。其時盲者であつた乞巧は主よ我信すと曰て彼を拜したのであります。節約傳九章一節、三十八節、之は慈母が嬰兒を抱き占むるが如き、行き届いた徹底した同情ではありませんか。盲者であつた乞巧が思はず知らず俯伏して拜したと云ふのはイエスの同情の神々しさを認められた爲であります。

(二) 或時パリサイの徒等は不義をなせる一人の女を曳き來り「此の如きものを石にて擊殺すべし」とモーセ律法の中に命じたり。汝は如何に言ふや」と申しましてイエスを試みました。然るにイエスは「汝等のうち



罪なき者まづ彼を石にて撃べし」と答へ、身を屈めて地に物かき給ひました。パリサイの徒はイエスの言に耻ぢて一人去り二人逃て女ばかり遺されたのであります。イエスは起あがり女に對ひ「婦よ汝を認し者は何處へ往しや汝の罪を定むる者なき乎」と申され、女は「主よ誰もなし」と答へました。そこでイエスは「我も汝の罪を定めず往て再び罪を犯す勿れ」と申されました。約翰傳八章三節一十一節云はぬは云ふに優ると云ふことがあり、ますやうに、場合に依ては沈黙は雄辯に數倍勝れるものであります。不義をしました女に對するイエスの態度に於きまして「再び罪を犯す勿れ」と云ふ簡單な一言は實に千百の贅言に勝りて女の心の奥の奥の奥底まで包んで居るではありませんか。

(三) イエスは無法の審判の結果ゴルゴタ山上に二人の盜賊の間に盜賊と等しく十字架に磔けられ給ひました。此前後に於て雲霞の如き群

衆は人間の口から出るあらゆる言葉を以てイエスを罵詈訕弄したのであります。然るにイエスは「父よ彼等を赦し給へ其爲す所を知ざるが故なり」(路加傳二十三章三十四節)と祈り給ひました。何と云ふ美しい、又偉大な而して同情に充ちた祈でありましやう。イエスの私共人間に對する同情は此一語に餘蘊なく示されて居ると申すことが出来ます。

要するにイエスの同情は徹底せざれば止まぬと云ふ底のものであります。或時イエスは一人の敎法師に對し「己の如く隣を愛すべし」と云ふ其隣に就て説明せんが爲め「善きサマリア人」(路加傳十章二十の喩話を語り給ひましたが、これは同情者としてのイエス御自身を遺憾なく示して居ると存じます。即ち此喩話の中のサマリア人と云ふのは平素ユダヤ人とは仇敵の間柄であります、けれども全く仇敵の籬を取除いて強盜の爲め瀕死の境に陥て居るユダヤ人に近づきまして傷を洗ひ、綳帶



するなど、叮嚀に介抱し、遂に自らは歩み、そしてユダヤ人を驢馬に乗せて旅亭に伴ひ、醫者を招き、看病人を雇ふて世話をしたのであります。而して全快の見込の立たた時、若干の金員を旅亭の主人に與へ、萬一不足の時、自分が一切引受るから介抱を依頼するに云て、目的地へ行たと云ふのであります。其サマリア人は取も直さずイエスで、サマリア人が全く自己を忘れて、しかも痒き所に手の届くやうに先の先まで行き届いた世話をしたのはイエスの徹底的な同情を見ることが出来ます。イエスは自ら我に來るものは我之を棄てず、約翰傳第六章と申されましたがイエスに知らるゝ程の人は生涯イエスの同情から洩れることはありません。ゴルゴタ山上にイエスの磔殺を監視して居りました百夫の長は胸を打て、彼は神の子なり、馬可傳十五章と讚美したと云ふことでありますが、同情の一事を以てしてもイエスは神なりと云はねばなりません。

キリストの心の作用は神の徳性及び攝理を顯はし、美妙と秀善とを實際に摸したる理想にして、神の能力及び神の智慧たるなり。又曰く、キリストは神の授任せる預言者、完備なる模範、天の嚮導者なりと。

シエームス、マルテナウ



ポロは汝等キリストの意を以て意とすべし彼は神の體にて居りし  
 かども自ら其神と匹しく在るところの事を棄難きことゝ意はず反て己  
 を虚うし僕の貌をとりて人の如くなれり五節立比書二章と申して居りま  
 すが蓋しイエスの謙遜に就てこれ以上論ずることは出来ずまい實  
 にイエスは完全に謙遜の徳を具備した天下第一人であります  
 イエスのナザレ邑に於る隠れた三十年の生涯は今時に珍らしい謙遜  
 な青年ではあるよと界限の人々に賞めそやされ給ふたことであらう  
 とは史蹟の徴すべき何物もありませんがイエス智慧も齡も彌増り神  
 と人との益々愛せられたり路加傳二章五十二節との一句證して餘りあると思ひ  
 ます年三十に達するや神の召命に應じて老たる母と若き弟妹とを遺

(四) イエスの謙遜

してヨルダン河畔に現はれ、バプテスマのヨハネに就きてバプテスマ  
 を受んとし給ふや、ヨハネが我は汝よりバプテスマを受べき者なるに  
 汝反つて我に來るか馬太傳三章十四節と固辭するをも聞き給はず暫く許せ如  
 此凡の義き事は我等盡すべきなり馬太傳三章十五節と云てヨハネからバプテ  
 マを受け給ひました「暫く許せ」のあたりイエスの謙遜な風姿が目  
 見ゆるやうではありませんか。  
 イエスはバプテスマを受け給ふて間もなく聖靈に導かれてユダの荒  
 野に入り、人を避け、世と遠ざかりて四十日四十夜の間、瞑想黙禱に耽り  
 給ひました。が後に飢餓を感じ給ふや、汝もし神の子ならば命じて此石  
 をパンと爲よ馬太傳四章三節との試惑を御受けになりました。其時イエスは  
 「人はパンのみにて生るものにあらず唯だ神の口より出る凡の言に因  
 る」馬太傳四章四節と云て試惑を退け給ふたのであります。神の子の自覺を持



ち給ふたイエスは少しも自己を顯はさず又自己を顯はさうともなし給はずして神の大能の蔭に隠れ給ひました。此自己を没して神のみを顯はさんとなし給ふイエスの謙遜は隨所に顯はれ、馥郁たる香氣を發して居るのであります。例之彼の富める若き宰が參りまして「善師よ」馬可傳十章と申しました時にイエスは「何を我を善と稱や一人の外に善者はなし即ち神なり」馬可傳十章と仰せになつて榮を神に歸し給ひました。又弟子のピリポが「主よ我等に父を示し給へ」四章八節と申しました節、イエスは「我を見し者は父を見しなり……われ汝等に語りし言は自ら語りしに非ず我に居る父その行をなせるなり」四章十節と答へて神を崇め給ひました。其他「我教ふる所は我教にあらす我を遣はし、者の教なり」約十節と云ひ給ふたこともあります。故にイエスがカペナウにて四人で昇いで來た癱瘋を病たる者を癒し給ふた時には「衆人み

な駭き神を崇めて曰けるは我等いまだ斯の如きことを見しことなし馬可傳二と申しましてイエスの働きを認めず、全然神を崇めて居ります。これイエスが神の中に隠れて居り給ふた明白な證據であります。更に又他の方面に於てイエスの謙遜を見ることが出來ます。先づ「税吏でありました」マタイがイエスの弟子になりました時舊友知己を招きまして留別の宴を催しました。當時税吏はロマ政府の用を勤むるものであるとして一般人民からは賣國奴の如く卑められて居りました。故に少なくとも愛國者を以て自ら任ずるものや、自稱義人等は「税吏など交際は勿論のこと、言語を交すことすら耻として居たのであります。然るにイエスは賓客として喜んで其席に臨み給ふたのであります。又「税吏」サアカイの家へは自ら進んで我今日かならず汝の家を宿らん」加路傳五節と稱して宿り給ひました次にベタニヤの癩病人シモン、家の招



待を受け、又賤業者であつた女と席を同うして飲食し給ふたこともありません。癩病人や賤業婦などは何れも士君子の共に齡しないものであります。イエスは喜んで交際をなし給ふたのであります。これ實にイエスが税吏や賤業婦の中にも尊き神の子の姿を認め給ふたに因ることは勿論であります。が、全く謙遜の結果自らの尊嚴を忘れ給ふたの外ならぬのであります。

「さがるほど其名をあぐる藤の花」と云ふ句もありません。やうにイエスは税吏罪ある人、賤業婦の友として市井の一無名漢に過ぎ給ひません。したけれども實は異能以上、奇跡以上に謙遜の人として仰がねばなりません。

キリストは人類の奉すべき永遠なる宗教を創立せるものなり、キリストよ汝こそ神との間には最早區別するところなかるべし。

(五) イエスの勇氣

人の前で無事の際に豪氣なことを云ふ人にして眞劍になると案外腰を抜かす人があります。又大事件に臨みて適當の處置をなす人にして極めて些細の事に見苦しき失敗を演ずる人があります。又他人に對しては常に勝利者の地位にありながら、自己に對しては毎も敗北者たる人があります。斯かる人は何れも眞の勇者とは申されません。眞の勇者は大山前に崩れ、洪河後に漲ると云ふやうな非常の際にも驚かず、自己の主義主張の爲には敢て生命を投ずることを辭しないものであります。イエスは此意味に於ても眞の勇者であつたのであります。試に少しく云て見ましよう。

(一) イエスの公生涯即ち年三十にして傳道界に身を投じ給ひまして



から、十字架の上に横死を遂げ給ふまで約三年の事を見まするに、イエスの周囲は凡て敵と申すよりは寧ろイエスは敵中に一人居り給ふたと云ふ方が事實に近いほど多く敵を持ち給ひました。けれども彼の巨獅が威風堂々百獸を睥睨して野原を行と等しく、その眼中には殆ど敵の存在を認め給はず思ふまゝを働き給ふたのであります。其一二の事を云ひますれば、第一に神殿を潔め給ふたことであります。抑もエルサレムの神殿は當時ユダヤ人の思想の中心點でありまして、神聖の場所とせられて居たのであります。然るにイエスが逾越節に際し詣でて見給へば異邦人の庭と稱せらるゝ所には牛や羊の悪臭先づ鼻を衝き、その吼たり鳴たりする聲は商賣人の叫び聲や、兎銀するものゝ言ひ争ふ聲と合して雑然紛然として名状すべからざる奇怪な光景であつたのであります。そこでイエスは義憤を發し、獅子奮迅の勢を以て繩をも

て鞭をつくり、彼等及び羊牛を殿より逐出して兎銀するものゝ金を散し其案を倒し、鴿を賣者に曰けるは此物を取て往けわが父の室を貿易の家とすることなかれ約翰傳二章と大唱し給ひました徒手空拳で敵中しかも敵の本營の眞只中に於てなされた事であることを見れば全く眞の勇者の振舞と云はねばなりません。次はエルサレム入城であります。約三年の間ガラヤで説教者として働き給ふたイエスは、パリサイ人の意地悪き反抗の爲め大なる打撃を受け、形勢は日に非となり、危害の身に及ばんとしたことは決して一再ではありませぬ。然るに今や其危険を全く忘れ給ひしものゝ如く弟子驢馬の子をイエスに牽きたりて己が衣を其上に置ければイエスこれに乘れり、人々多くは其衣を路上に布き、あるひは樹の枝を伐て路上に布き、かつ前にゆき後に従ふ人呼り曰けるはホザナよ主の名に託て來る者は福なり、主の名に託て



來る我等の父なるダビデの國は福なり至上處にホザナよ馬可傳十一章七節  
 斯の如く公然メシヤを標榜して入城し給ひました大膽と云ひまじや  
 うか豪氣と申しまじやうかイエスには私共の想像することの出來な  
 い或偉大なる力があるのであります。  
 (二) 敵に對しまして眞の勇者の振舞をした人は其例を求むるに決し  
 て困難はありませぬけれども親しき人々の切なる願や斷ち難き求め  
 を斥けて一生を誤らなかつた人は餘り多く見當りませぬイエスは此  
 點に於て確かに天下第一人であります。思ふに彼ほど世の人々から期  
 待された事の多い人はありません。例之バブテスマのヨハネは彼を  
 以て來るべきメシヤ王國の君主と思ふて馬太傳十章三節 居り又十二人の弟  
 子及び一般民衆も同様で其榮位に就き給ふ日を指折り數へて居た有  
 様馬太傳二十章二十一節 でありませぬ。然るにイエスはそれらの人々の誤視

謬觀を呵責し却て長老祭司などに苦められ最後には遂に横死すべき  
 ことを告げ給ひ馬可傳十章四十五節 ました。彼は又或時は骨肉の兄弟たち  
 からも約翰傳七章三十一節 多くの崇拜者たちからも馬可傳六章十五節 大預言者であらうと  
 の期待を受給ひました。けれども天より火を呼下すやうな奇蹟もなし  
 給はず地から泉を湧出さしむる如き異象も示し給はずして却て自分  
 は失はれた人々に遣はされた愛の使者であることを教へ給ひました。  
 而してイエスは十字架上に疾痛慘憺の苦を嘗め給ふ際侮蔑嘲弄では  
 あるが自己を救ひて十字架を下りよ馬可傳十五章三十節 イステエルの王キリス  
 トは今十字架より下るべし然らば我等見て之を信せん馬可傳十五章三十二節 の  
 期待を受給ふたのであります。然しながらイエスは遂に他人の同意を  
 得ん爲に又他人に歡迎せられん爲に一回だも自己の意見を枉たり教  
 義を易たり主義を變じたりし給ふたことはありません。希伯來書の記



者が「彼は凡の事に我等の如く誘はれたれども罪を犯さざりき」四章十  
 と申した通りであります。蓋し十字架の磔死はイエスの其變ることな  
 かりし主義に基くものであります。人をつき落しても利益を得やうと  
 する世の中に、人が與へんとする榮位王冠を弊履の如くに棄て、十字  
 架の死をとり給ふた彼は實に無慾恬淡此上もなき方である。と申さね  
 ばなりません。同時にイエスには何物でも衝突て來るものを一々はね  
 返す所の非常な彈力が秘られてあることが知られます。  
 (三) イエスが十字架の上に絆切れ給ひました時に、當日警護の任に服し  
 て居りました百夫長は胸を打て「誠に此人は神の子なり」馬可傳十五と申  
 したと云ふことであります。が、恐るべき國家の權威國民の壓迫に、びく  
 ともしない自己の主張を貫徹せしめ給ひました勇氣種々なる姿を  
 以て襲ひ來りました誘惑を平然として退け給ひました勇氣を見まし

ても誠に此人は神の子なり」と云はざるを得ないのであります。然るに  
 イエスの勇氣はそれのみではなく、更に大なるものがあります。マルチ  
 ン・ルーテルは宗教改革の偉人でありまして「オルムス全都の瓦の如く  
 悪魔の數多くも恐るゝ所ではない」と豪語した人でありますが、一方  
 には「我はロマ法王よりも大僧正よりも我心を慌れるなせかと云ふに  
 我心の中には己と云ふロマ法王が跋扈して居るからである」と云て居  
 ります。これは王陽明が「山中の賊を破るは易く心中の賊を破るは難し  
 と申したのと同じで人間の弱き所であり、大使徒ポロも「われ願  
 ふ所の善は之を行はず、反て願はざる所の悪は之を行へり……噫わ  
 れ困苦なる哉」九節、二十四節と申して居ります。イエスと云へども人で  
 ある以上、外より來る所の誘惑がありましたやうに、内より湧出る誘惑  
 もありました。野の試誘とゲツセマネの園の苦悶とは其代表的のもの



と申して差支はありますまい。イエスがヨルダン河にてバプテスマのヨハネからバプテスマを受け給ふてから荒野に退いて自己の使命に就き、又如何にして其使命を果すべきかに就て考へ、神の聖旨を思ひ給ふたのであります。其間に「汝若し神の子ならば命じて此石をパンとせよ」汝若し神の子ならば己が身を下へ投よ、蓋なんぢが爲に神その使等に命せん、彼等手にて支へ汝が足の石に觸れざるやうすべし、「汝もし俯伏て我を拜せば此等を悉汝に與ふべし」と云ふ三の試誘に遇ひ給ひました。勿論これは主観的のものでイエスの胸中より湧き出たものであります。即ち彼の使命はイスラエル人民の希望して居るやうに政治的の王國を建設するものであらうか、救主とは昔ダビデが文武の大權を握りて天下に號令したやうな君王の位にあるものであらうかとの苦悶であつたのであります。然るにイエスは第一に對しては人はパンのみ

にて生るものに非ず、唯神の口より出る凡ての言に因ること云ひ、第二に對しては「主たる汝の神を試むべからず」と答へ、第三に對しては「サタンよ退け、主たる汝の神を拜し、唯之にのみ事ふべし」と宣言し給ひ、馬太傳四十一、また即ちイエスの王國は榮華の王國にあらずして正義の王國であり、その王位は宮殿の中にあらずして心中の王位であること決し、斷斷乎として試誘を退け給ふたのであります。當時は救主の出現を大旱に雲霓を望むやうに待て居りました時代でありますから、少し遠大の志望あるものは誰も其試誘に陥るのであります。イエス程の大偉人、しかも神の子の太自覺を持ち給ひましたイエスが其試誘に陥り給はざりしこと云ふことは如何に主義に忠であつたか、と云ふことを示して居ります。次に彼は今や最後の決斷をなし給ふこととなりました。即ち某二階座敷の晚餐を終り給ふて十一人の弟子を携へてゲッセマネの園



に來り、八人を門の外に置きペテロ、ヤコブ、ヨハネの三人を伴ふて内に入り、更にイエスのみ少し進み行て祈禱をなし給ひました。聖書には「イエス痛く哀み切に祈れり、其汗は血の滴の如く地に下たり」路加傳二十二と記されてありますやうに、彼は此時眼前にある十字架の耻辱を思ひ、又實に負ひ難き重大なる救の責務を考へ給ふて、他に救の道もあらばと神の聖旨を尋ね給ひました。けれども十字架が神の聖旨であるとの明白な神の聲を聞き給ふや、起きよ我等行べし馬可傳十四と云て自ら先に立ち勇ましく十字架を指して進み給ひました。斯て全き強き己に勝ち給ふたのであります。

(四) 更にイエスが自己に對して勇者であり給ふた例は飢餓と貧窮に陥り、輕侮と嘲弄を受け、友に棄られ、兄弟に見離され給ふた場合にありましても、失望したり、狼狽したりし給ふた跡がありません。又故意に反

抗を受けたり、意地悪き妨害に遇ひ給ひました時でも、憤激なさるでもなければ、懊惱なさるでもありません。と申しまして得意だからと云て跳躍なごなさることは無論ないのであります。太平洋の中心には永遠より動搖なき底があると申しますが、實にイエスは凡ての時、凡ての場合に於て同一の心的状態を維持し給ひました。其偉觀のほど讚美の外はありません。



申すまでもなくイエスが死罪に處せられ給ひました直接の原因は、カヤバの法廷で審判の際祭司長が「汝は頌べき者の子キリストなるか」と問ひしに答へて「然り人の子大権の右に坐し天の雲と共に現はれ来るを汝等見るべし」馬可傳第十四章と云ひ給ひしにあるのであります。果して然らばイエスは直言の爲に死を招き給ひしものであると云ひましても差支はありますまい。此一事偶々以て彼が如何に直言の人であつたかと云ふことを示して居ります。而してイエスが學者やパリサイ人などに對してなし給ひし直言は何れも強烈過激でありまして覺えず快哉を叫ばしむるものゝみであります。或は苛酷に失せずやと思はしむるものもありません。然し積年の因習を打破し、固着せる頑迷を覺醒

## (六) イエスの直言

せしむるには止を得ざる次第でありませう。

イエスがカペナウムの寓居に居り給ひました節、四人で昇ぎ込んだ癡患者がありました。彼が其信仰を見て「子よ汝の罪赦されたり」と癡患者に申されますと、群衆の中の數人の學者は不敬なことを云ふ男ではあるよ、神にあらずして誰か罪を赦すことを得ん」と佛々小言を云ひました。そこでイエスは單刀直入「それ人の子地にて罪を赦すの權威あることを汝等に知せん」と云て癡癡を癒し、學者等に返す言なからしめ給ひました。或時イエスは其寓居で當時世間から卑しめられて居ました税吏、罪ある人々を共にし給ふたことがあります。然るに學者やパリサイの人等は之を批難して何故然るか。イエスの弟子等に詰問しました。イエスは之を聞き給ふて學者やパリサイの人等に向ひ「康強なる者は醫者の助を求めず、唯だ病ある者これに需む、わが來りしは義



人自ら稱して義人と云ふものを召くために非ず罪ある人を召きて悔改めさせんが爲なり馬可傳第二章十節と痛快極まる皮肉な言を與へて沈黙せしめ給ひました。當時安息日は神聖の日として聖別せられて居りまして、遂には病人でも癒してはならぬと云ふやうになりました。然るにイエスは平氣なものである安息日に十八年の間、僱僕て伸ること能はざるものを癒し給ひました。案の如く會堂の宰は烈火のやうに怒りまして安息日にせずとも他の六日の間に於て醫療をしたが可らうと申しました。イエスは是に於ては勵聲一番偽善者よ汝等おのゝ安息日には其牛や驢をとき廐より牽き出して水を飲さるや、況て此女はアブラハムの裔なり、十八年サタンに縛られたる其結を安息日に解べからざらんや路加傳第十三章と答へて敵對した者を愧しめ給ひました サドカイの徒がパリサイ人と同盟しまして若し汝が果して救主であ

るならば其證據に「天の休徴を我等に見せよ」と難問を出したことがあります。其時イエスは「汝等暮には夕紅に由て晴ならんと云ひ、晨には朝紅又曇に由て今日は雨ならんと云ふ。偽善者よ空の景色を別つことを知りて馬可傳第十六節盲者は見跛者は歩み、死せるものは甦へされる。此時の休徴を別ち能はざるかと答へて彼等の蒙を啓き給ひました。イエスの弟子の中に手を洗はずに食するものがありましたので、パリサイのひと學者等イエスの所に來まして、汝の弟子は何故古の人の遺傳に遵はずして盥はざる手を以てパンを食するか」と詰問しました。そこでイエスは「イヤヤの此民は唇にて我を敬へども其心は我に遠ざかり、人の誠を教となして徒らに我を拜す」との言を引いて痛棒を喰はせ、更に人倫の第一なる孝行を無視して神に禮物をなせばそれで可とするやうな誤つた考を駁し、汝等は實に己の遺傳を守らんとて能も神の誠を棄る



ものなり」馬可傳第七章と云て其急所を衝き、彼等をして顔色なからしめ給ひました。其外路加傳第九章五十七節以下、又は馬太傳二十一、二、三章等に於きましてイエスは譬喻を用ひ、又は最も露骨に「偽善者よ」と大聲疾呼して最も激烈に警告戒諭して居り給ふのであります。

以上は極めて少數の例でありますが、これだけでもイエスが如何に直言の人であると共に過激の人であつたかと云ふことは確かに推察が出来ます。而して殊に注意すべきことは彼は教敵の重圍の中にあり給ふて、しかも其教敵と面と面と相對して斯の如き苛酷と思はるゝやうな、又時には毒舌に類するやうな強烈過激な直言をなして居り給ふことであり、實にイエスは自己の主義を主張し給ふに當りまして、又教義を宣傳し給ふに際しまして、迂遠なことを云ひ給はず、況して妥協とか、苟合とか、斯かる忌はしき態度には一度たりとも出で給ひま

せんで、何處までも積極的に頑強に押出して居り給ひます。私共は此處にもイエスの天晴な男性的なる眞勇を見出すのであります。



(七) イエスの柔和

ポロはコリント人に送りました書簡の中に「キリストの柔和と寛容を以て汝等に勸む」哥林多後書第十章一節と申しまして殊更にイエスの柔和と云ふことを高調して居ります。而してイエス御自身も柔和なる者は福なり、其人は地を嗣ことを得べければなり馬太傳第五章五節と云て八福の中の一つに數へ給ひましたのみならず進んで「我は心柔和にして謙遜者なれば我軛を負て我に學へなんちら心に平和を得べし」馬太傳第十一章一節と命じ給ひました。キング博士はイエスの所謂柔和なる者は福なり其人は地を嗣ことを得べければなりと云ふ一句に就きまして「柔和なる人には現在生活から最大恩寵を得べき約束がある。即ち柔和は人生の最大享樂へ通ずる一王道である。柔和な人は斷へず輕んせられ蔑られると云ふ

感情を脱する。それ故に傲慢な人ならばひたすら惨めさを感じる場合でも、柔和な人は満足を感じ愉快を感じる。柔和な人は他人の喜びを共に喜ぶ事が出来る。それで眞實にあらゆる喜びを味ふのである。己を支配する者は凡てを支配する。自己を常に制御する人は斷へず一段低きものを一段高きものゝ爲に、一時的のものを永久的のものを爲に犠牲にする。人生の最善事は常に此克己の人の爲に存在する。確に柔和な人は地を嗣のである。彼等は現在に於て最も多く人生より得る所がある。と云て居りますが、イエスは能くそれに適愼る所の人であつたのであります。更に別言すればイエスの柔和は神に向ひましては全然の服従となりて顯はれ、人に對しましては寛容親切となりて發して居ります。イエスの神に向ひ給ふての服従の方面は「イエスの勇氣」の所で詳細に述べてありますから、此には彼が人に對し給ふて如何に寛容で且親切で



あり給ひしか、換言すれば剛膽鬼を挫ぐ如き勇者なるイエスの半面には、婦女子も及ばぬほどの柔和即ち「やさしい」「しをらしい」「點のありました」ことを述べて見やうと思ひます。

(一) 先づ寛容の點から申しますと、或時雷の子と呼ばれる位、激し易き、烈しき性質を持って居ました弟子のヨハネがイエスに向ひまして「師よ、汝の名に托て鬼を逐出せる者を見たりしが我等と共に従はざる故、これを禁めたり」と申しました。多分ヨハネは權威を以て其不都合を鳴らし、彼等をして顔色なからしめたものであらうと思ひます。然るにイエスは「禁むること勿れ」と唯だ一言お答へになりました。而して其理由は「我等に敵抗ざる者は我等に屬者なり」(馬可傳九章四と云ふにありませぬ。イエスの此「やさしい」寛容の心を以てしまして、現代人のやうな利害の念に敏き人々に比べますれば、實に天地霄壤の差である)と云はねばなり

ませぬ。イエスが途を行き給ふ時、一人の青年が走り來りまして「善師よ、我ががりなき生命を嗣ために何を行べきか」とお尋ね致しました。でイエスは即座にモーセの遺した十誡を守れば可からうと答へ給ひました。所が青年は「師よ、是みな我幼より守れるものなり」と鼻の先でせゝら笑をしながら申しました。イエスは此眞面目なやうな人を愚弄にしたやうな態度に怒りもし給はず、却つて彼を見て愛しみ(馬可傳第十章十かぎりなき生命を嗣べき道を教へ給ひました。イエスが青年の無禮を答め給はずに諄々と説き示し給ふ御心の「やさし」を見るやうであります。ゼベダイの子のヤコブとヨハネは或日竊かにイエスに見えまして「汝榮を得んとき我等の一人を其右に、一人を其左に坐せしめよ」と願つたのであります。平素靈的、精神的、王國建設に心を碎きて居給ふイエスにとりましては、全く意外の要求でありますから、イエスの御心の中はさ



こそと思ひ遣られるのであります。然るにイエスは兩人の其思ひ違ひに對しましては別に難詰もし給はずに、他事ながら奉仕の覺悟と精神とを固くすべきことを教へて「我右左に坐する事は我予ふべきに非ず、たゞ備へられたる者は予へらるべし」馬可傳十章三十と申されました。無知なる者を辱めず、却つて其あはれなる心に同情して、之を教へ給ふ廣きしかもやさしい「其御心のほご慕はしき限りであります。ゲッセマネの園に於るイエスの苦難は苦難中の苦難であります。彼は弱き頼みにならぬ弟子等に向ひ「我心いたく憂へて死るばかりなり。こゝに待て我と共に眼を醒しをれ」馬可傳第十四と云て同情を求め給ふほご苦み給ふたのであります。然るに弟子等は不甲斐なくも主の御苦難を全く忘れたかの如くに、ふらふらと座睡を始めました。心が悲哀と苦痛とに依つて掻き亂されました。場合には、得て激怒し易きもので、思ひも寄らぬ過誤

をするのは多く斯かる際であります。イエスの手は榮螺の如く振上げられるかと思ひの外、その靈には願ふなれど肉體よわきなり。馬太傳二十六節一四と云て、反對にイエスは弟子等の疲勞の甚だしきに同情して居給ふのであります。其「やさしい」しをらしい「御心何と美はしきことではありませんか。此等は二三の例に過ぎませんが、イエスの柔和な「やさしい」御心は斯の如く發して寛容の徳となつて居るのであります。

(二) 次に親切の點を申上りますれば、先づベタニヤのマルタ、マリアに對することを擧ねばなりません。マルタ、マリアの兄弟ラザロは病死をいたしました。それでイエスはベタニヤを訪れ給ふのであります。弟子等が「ラビ、ユダヤ人は近來も石をもて汝を撃んとせしに復かしこに往たまふかと申しました程、イエスは教敵に睨まれて居給ふたのであります。けれども斷乎として發足し、ベタニヤに着給ひました。マルタ、マリアは



悲哀の中にも非常の歡びを以て迎へたのでありますが、又それだけ不平も多かつたやうで、マルタとマリアは「主よ此に在せしならば我兄弟は死ざりしものを」と申して居ります。イエスは彼等の胸中を思ひ遣り、死の悲哀を眼前に見て涙を流し（約傳十一章一節―四十四節）給ひました。イエスは又「我等またユダヤに行べし」と死を覺悟してマルタ、マリアを訪れ給ふた譯で、如何にも至れり盡せる親切の情と同時に友を思ひ給ふやさしい御心が流露して居るではありませんか。又他の場合にイエスはベタニヤのマルタ、マリアの家の客となり給ひました。其節マリアは主の足下に坐しまして其教を熱心に傾聴しました。これに反しマルタは饗應をしやうと思ひまして忙しく立働きました。末遂に心を取亂し、イエスに近よりまして「主よ我姉妹われを一人遺て勞働しむるを何とも意はざるか、彼に命じて我を助けしめよ」と平常の根性をさらけ出して、あら

もなきことを申しましたが、婦人の言としては誠に不謹慎の至りであります。然るにイエスは衷心マルタを思ひ給ふ所から怒りもせず、マルタよマルタよ汝多端により思慮ひて心勞せり、されど無て叶ふまじき者は一なり、マリアは既に善業を選びたり此は彼より奪ふべからざる者なり（路加傳十章三十一節）と御答へになりました。誰か此親切なやさしい情のある言葉に逆ふことが出来しやう、マルタは俯伏して其罪を謝したのでありましやう、イエスがナインと云ふ邑に行き給ひました時、其邑の門の所で葬式の行列に逢ひ給ひました。それは、獨子を亡したのであります。イエスは「妾を見て憫み哭くなかれ」と云ひつゝ、概に手を按け「少者よ我なんちに命ずおきよ」（路加傳七章十一節―十八節）と申されますと、死だ少者は起て言ひ始めました。それで彼は其少者を妾に渡し給ひました。イエスが獨子を失ひし哀れな妾の胸中を察し給ふ「やさしい心根、ありが



たしともありがたき限りであります。多くの人々がイエスから祝福して貰ひたいと思ひまして、嬰兒を携れて來ました時、弟子等は騒擾しいからと云て拒みました、けれども彼は却つて拒んだ弟子等を責めて、嬰兒を我に來らせよ、彼等を禁むる勿れ、神の國に居る者は斯の如き者なり路加傳第十八章と稱して、嬰兒を抱き上げ、頭を撫で、暫くお樂みになつたのであります。嬰兒の親たちはイエスと弟子等との間には其親切なやさしい點に於て到底わたるべからざる大きな淵のあることを認め、たことであらうと思ひます。パリサイの人々が不義をいたしました婦人をイエスの前に曳來りまして「かくの如き者を石にて擊殺すべし」とモ一七律法の中に命じたり、汝は如何に言や」と問ひ試みしましたことがあります、然るにイエスが「汝等のうち罪なき者まづ石にて擊べし」と答へて、彼等の反省を促し給ふたので、何れも耻て婦人を一人殘して立去り

しました、此時イエスは婦人に向ひ「汝の罪を定むる者なき乎」我も汝の罪を定めず往きて再び罪を犯すなかれ」と云ひ給ひました。彼の罪を犯せる婦人に對し給ふやさしい取計ひ、深き親切の程驚くばかりであります。ゲッセマネの園外に於て、敵がイエスを捕縛しました際、弟子の一人が祭司長の僕を撃て、其右の耳を削落しました。弟子等から云へば敬愛する師の一大事でありますから、これ位のことにはあるべき筈であります。又イエスから申しましたも、死生の別れ道で更に大なる出來事であるのであります。然るにイエスは此非常の場合に際しまして、之を釋せど曰その耳に捫て醫したり路加傳第二十二章四とありますやうに醫し給ひました。平素のやさしい御心は斯かる時にも遺憾なく發顯して、親切の最高頂に達して居るのであります。



(八) イエスの忍耐

俚言こゝろごになる堪忍かんじんは誰もするならぬ堪忍かんじんするが堪忍かんじんとありますやうに、眞正ほんたうの堪忍かんじんは出来ぬと思はれるやうなことを忍ぶにありますが。世に斯かかる忍耐にんたいをした人でイエスの右みぎに出るものがありまじやうか。實じつに彼かれはならぬ堪忍かんじんするが堪忍かんじんと云ふ俚言こゝろごを具體化ぐたいくわした人であるを申して

も一向差支かつかいはありません。

(一) イエスの性質せいしやうは一面火いめんかの如く熱烈ねつれつであり、又時勢ときせいを憤慨ふんがいして居給ゐたまふたと云ふことは、神聖しんせいなるエルサレム神殿しんでんを商人等しやうじんたちが賣買うりかひの家いへとして蹂躪じゆりふして居るのを見るに忍びず、繩なはの鞭むちをつくり商人等しやうじんたちを叩たたき出し給たまひましたことや、馬可傳まかでん十一節じふいちぶつ十バリサイ人等びとたちの暴狀ぼうじやうを憤慨ふんがいしてあゝ禍わざはひなる哉かな偽善ぎぜんなるバリサイの人びとよ、馬太傳またでん十三節じふさんぶつと絶叫せつけいして居給ゐたまふことや

に依よて知しることが出来できます。斯かの如ごとき熱烈ねつれつなる性質せいしやうを有もち給たまひしイエスが二十歳にじふさいに至いたり給たまふまでナザレの寒村かんそんに一介いっかいの木匠ぼくせうとして家具かぐを製せいし、農具のうぐを造つくりて全く世事せいじに無頓着むとんちやくな隠君子いんくんしの如ごとく暮くし給たまひしことは不思議ふしぎと云はねばなりません。試こころみにイエスの時代じだいに於おけるユダヤ人びとの有あり様の一般いぱんを申ましますればイエスの所謂いふ偽善ぎぜんと云ふ二字ふたごで盡つくされるのであります。即すなはち人民じんみんの上位じやうゐに立つ所のバリサイ人びとやサドカイ人びとや學者がく者しや長老ちやうらうなどと稱しょうせらるゝ所の者等ものたちは別に敬神けいしんの念ねんあるでもなく、熱心ねつしんなる信仰しんかうのあるでもないのに、敬神けいしんの印しるしとして其衣そのころもの裾すそを大きくしたり額ひたいに附つする佩經はいきやうを幅廣はくひろくしたり、十字街頭じゅうじきやうに立たつ祈禱いのりをしたり、なるたけ人ひとに見みえよがしに施濟せいきをしたりして其行爲そのおこなひは殆ほとんど鼻持はなもちもならぬほどの醜態しうたいで全くイエスが評ひやうして汝等なんぢらは白しろく塗ぬたる墓はかに似にたり外そは美うらしく見みゆれども内うちは骸骨がいこつと諸もろの汚穢けがれにて充みつ、馬太傳またでん二十三章じふさんしやうと云ひ



給ひし通りであります。既に上流が斯の如くでありますれば、上の好む所下之よりも甚だしき道理で一般人民の腐敗墮落せることは云はずとも、その事でありませぬ。されば時世を憤慨せる、而して熱情に富み給ふイエスの心を以て其ユダヤ人上下の陋状醜態を見給ふては少なからず心を痛め、人民の將來を考へ給ふては人知れず涙を流し、果は幾度か鋸を投じ鎚を抛ちて蹶起せんとし給ふたことであつたらうとは容易に想像されることでもあります。彼が傳道界に出で、後の言に「我父は今に至るまで働き給ふ我も亦働くなり」(約翰傳五章十七節)と云ひ給ふて熱烈なる活動をなして居給ふのは長年月の間送り出んとする熱情を抑へに抑へて忍び給ひし反動とも見らるゝのであります。それは兎も角、火の如き熱情を内に抑へて隠忍三十年に及び給へるは、凡人の到底企て及ぶ所ではありませんこと、以てイエスの忍耐力の如何に大なるかを證し

て餘りあると思ひます。然らば何故斯く長く隠忍し給ふたかと云へばイエスの所謂「我時は未だ至らず」(約翰傳二章四節)で機會の熟するのを待ち給ふたのに外なりません。

(二) 此事は三十歳に達し給ふまでにあつたのみではありません、三十歳以後三年の公生涯に於ても見る事が出来ず、即ちバプテスマのヨハネは彼より六ヶ月ばかり以前にヨルダン河畔に出現して悔改を獅子吼した偉人でありませぬ。然るに其侃諤の言はヘロデ、アンチパスの逆鱗に觸れ、遂に捕へられて獄に投せられました。勿論イエスはヘロデの亂行を知悉し、當時の人々の敗徳汚行を詳知して居給ふたのでありますから、ヨハネの精神を繼て義人に仇するヘロデに對しては更に激烈なる攻撃の矢を放ち給ふべき筈であります。けれどもイエスは燃ゆるやうな躍り立つやうな胸の感慨を抑へて、竊にガリラヤに退き、そして



ヘロデの毒手を避け給ひました馬太傳四章十二節それはイエスの時未だ至らなかつたからであります荒野の試誘の後彼は故郷のナザレに歸り、カナに於る知人の婚筵に列し給ひました其節如何なる手違でありますしたか、宴半にして葡萄酒がつきました其母マリアは主として婚筵の世話をして居りましたが此不體裁に驚き、何とかせすば家門の耻辱、一族の名折れであるとして心を碎いた結果、イエスに訴へたのであります。然るに彼は當時メシヤ的活動の精神は鬱勃として胸中に燃えて居ました婦よ汝は何の與あらんや我時は未だ至らず約翰傳二章一節云てマリアの要求を退け給ひました同じくナザレ歸省中イエスは安息日に會堂に入り聖書を読み後、暗に自らのメシヤなることを示し給ひました會堂に在りし者はそれを聞いて非常に憤り、起てイエスを邑の外に出し投下さんとして其邑の建たる山の崖まで曳て行たのでありま

す。然るに彼は我時は未だ至らずで侮辱と嘲罵を聞き棄にし、別に争ひもし給はずするりと抜けて逃げ歸り給ふたのであります路加傳四章十二節又曾て彼がエルサレムの神殿に於てパリサイの人々と議論の末、終に彼等を説破し給ふた時に彼等は卑怯にも石を以て撃んとしたのであります。然るに彼は隠れて其中を過り神殿を出で給ひました約翰傳八章十二節彼は使命の大なるものゝあるを思ひ給ふては、これしきのことにつまらぬ紛争を惹起すを以て愚なることゝなし給ふたのであります。若しそれ橄欖山に於てパリサイの人々に捕へられて後、カヤバの法庭、ピラトの面前などに引出されて取調を受給ふ際に於て、イエスの侮辱嘲弄を受給ひしことは筆にするにも忍びぬほどであります。即ち或者はイエスに唾し、又その面を掩ひ拳で撃き、手の掌で批たのであります。又ロマの兵士等は彼に紫の袍をきせ、棘の冕を冠せ、ユダヤ人の王



安かれと云ひ、又韋を以て其首をたゝきかつ唾し、跪きて拜しました。何と云ふ無禮な處置でありませう、それでも彼は人々が奇しとするまで沈黙して、ちつと忍耐して彼等がするがまゝに任せ給ひました。そして愈々ゴルゴタ山頭に曳往れ、二人の盜賊と共に十字架上に釘づけられ給ひましたが、此にても多くの群衆は「聖殿を毀て之を三日に建る者よ自らを救ひて十字架を下よ」人を救ひて自己を救ふ能はず、イスラエルの王キリストは今十字架より下るべし、然らば我等見て之を信せん」と申しまして彼を愚弄したのであります。馬可傳十四章一節「けれども彼は遂に其忍耐を破り給ひませんでした。否却つて沈着は一層沈着を加へ、靜に天を仰ぎて父よ彼等を赦し給へ其爲す所を知らざるが故なり」路加傳二十三と熱烈なる祈禱を捧げて神の赦免を願ひ給ふたのであります。あゝ何たる男々しき御心でありませう、イエスの忍耐力は此に

至りて遂に人の業ではありませぬ  
 (三) 以上はイエスが他から加へられ給ふたあらゆる場合に於る忍耐の例であります。がそれに反して彼れの方から他に對して即ち積極的に忍耐し給ふた例を擧るならば又驚くべきものがあります。先づパリサイのニコデモと云へる人が夜彼に來りて教を請ふたことがあります。ニコデモは宗教家で學者でありますから相當に靈界の智識を有すべき筈であるのにイエスの議論は一向了解出來ず、小兒のやうなことを云て居るのであります。短氣の者ならば豎子教ふべからずと云て願みぬであります。やうが、イエスは諄々として嚙で含めるやうに教へ給ひ節約傳三章一節「次」にイエスはガリラヤに行給ふ際、サマリアを経給ふたのであります。が、スカルと云ふ邑のヤコブの井の傍らで一婦人に水を求め給ふたことから、ゆくりなくも教話を始め給ひました。婦人



は最初の中、サマリア人とユダヤ人とは交際をしないのに何故妾に水を求めるかなどと申し、其後も色々彼を辱しめて居るのであります。然るにイエスは一人の靈魂を救ふことの實に貴き事業で又神の最も喜び給ふことなるを御存じでありますから、其屈辱を忍んで温言以て諄々と教へ且説き聞せ給ひました。が遂に婦人は仇敵視して居るユダヤ人なるイエスの前に頭を垂れて一切の罪過を懺悔したので、約翰傳四章一節一二節あり、又パリサイ人やサドカイ人などが税をカイザルに納るは宜や否路加傳二十章二十二節とか、七人の兄弟が一婦人を妻としたとすれば路加傳二十章三十四節とか、休徴をなして我等に見せんとことを汝に請ふ馬太傳十二章三十八節とかと愚にもつかぬ質問を發した時でもイエスは彼等の腑に入るやう答へて居給ふのであります。されば彼がサマリアを経てエルサレムに行給ふに際しサマリア人が彼の一行

を冷遇しました時弟子のヤコブ、ヨハネは大に怒り、主よ我等エリヤの行し如く天より火を召降し彼等を滅さんとする可かと彼に訴へました。が彼は靜に人の子は人の命を滅す爲に來らず唯これを救ふ爲なり路加傳九章五節と答へてさつさと他の郷に行給ひました。又弟子等が人の罪を赦すは七度までかよひました時に、イエスは七度とは云はず七度を七十倍せよ馬太傳十八章二十一節と申されました。其忍耐は實に絶對無比のものであつたと申すことが出来ます。

(四) 更に見落すことの出来ないのはイエスの弟子に對し給ふた忍耐であります。十二人の弟子は何れもガリラヤの漁夫か、農夫か、税吏の類で、云はい野生であります。さればペテロのやうな血氣に逸る亂暴者もあれば、又ユダのやうな陰險な腹黒きものもあり、一方に疑ひ深きトマス路加傳十章三節の如きものがあるかと思へば他方には生馬の目を抜くやうな才子



肌のマタイがあること云たやうな鹽梅で、之を統御し、教導することは容易なことではありません。加之弟子等の凡ては全く肉の物質的觀念に囚へられて居りましたので、イエスの精神的、靈的の考へとは氷炭相容れざる有様で、弟子等は主の最後まで其眞意を了解することが出来なかつたのであります。今一二の例を挙げますれば、イエスがカイザリヤピリビに退き、弟子等を教養し給ふ際、自らの使命を語り、遂に死ななければならぬことを明かに示し給ふや、將來の榮達を夢みて居るペテロは「主よ好からず」馬可傳八章三十三節と云て遮ぎつたのであります。或時弟子等はイエスが王位に即き給ふことを豫想して、其際に於て最も高き位を得るものは誰であらうか馬可傳九章三十三節と互に論じたともあります。又權勢や名望に渴して居たヤコブとヨハネとは露骨に彼に對して「汝榮を得んとき我等の一人を其右に、一人を左に坐せしめよ」馬可傳十章三十五節

と請ふたのであります。彼の最後にエルサレム入城の際には驢馬の子に乗り堂々として入城し給ひましたが、其節弟子等は歡喜極まりて狂氣の如くに勇み立て一節一十節 居りました。既に勝利を目前に幻の如くに見て居りました弟子等はエルサレムの神殿の壯麗宏大を見まして「師よ視たまへ此石この殿宇いかに盛ならずや」馬可傳十章一節と申して胸を躍らして居たのであります。斯かる次第で弟子等はイエスの使命を全く誤解し、彼が王位を得給ふた後の立身出世を考へて居たのであります。さればイエスは遂に自己の眞意を領解され給はずに十字架に釘けられ給ひました姿であります。然るに其三年間に於る彼の弟子等に對する態度を見ますに一度たりとも失望の聲を發し給ふたことがなく、駄目だと云て匙を投げ給ふたことはありません。却て倦す撓まずに指導をし、教養をなさいました。其死後、弟子等が一人残らず其の志を繼いで、主



の御爲に身命を賭して活動して居りますのは其の生前に於る教訓の眞意を領解したからであります。彼は死に至るまでも忍耐して弟子等を教へ給ふたのであります。其の忍耐は唯だ驚く外はありません。

## (九) イエスの無罪

人は誰でも其心に於て自己の思念の正邪、行爲の曲直を知るものであります。これ即ち人が罪を有する證據であります。凡そ人として其生涯に於て一點の瑕瑾なしと意識し得るものはありません。彼のユダヤ人の父と仰がれましたアブラハムでも、大律法家モーセでも、イザヤ、エレミヤ、エゼキエルの如き大豫言者でも、又イエスの愛し給ひしヨハネ、ペテロ、ヤコブの如き大使徒でも、ポロの如き大傳道者でも、其傳記を調べて見ますならば何れも自己の罪を告白し、懺悔して居ることを發見するのであります。單に基督教界の人のみではありません。天下古今の名士は何れもさうであります。彼の支那の聖人、私共が以て師表と仰ぐ道徳家孔子は、徳之不修、學之不講、聞義不能徙、不善不能改、是吾憂也」と申



されました。又彼のギリシヤの哲學者である有名なブレットーと云ふ人は罪惡の念に堪へずして天の救援を求めたと言ひ傳へられて居りまゝ然るに獨りイエスは大山の平原に聳ゆるやうに特殊の地位を占め給ふて品性の純潔無罪なることは何人も拒むことは出来ません。イエス在世の時代には其敵となりた人々は、どうがなして彼を陥れたいものであると思ふて、或は尾行したり、間諜を使つたりして其一行を鶉の目鷹の目で注意して居たのであります。遂に一點の罪證を發見することが出来なかつたのであります。而して彼の死後二千年の研究せられました。これが亦無駄骨折でありました。大畫家は自己の作の不備な點を能く知りて居ると申しますが、それと同じやうに人は其品性が高潔になるに従つて自己の不完全不充份であることに氣がつくものであります。ポロロが「我は罪人の首なり」と云て居るのは即ちそ

れであります。然るにイエスは其弟子等に罪を赦し給へと祈ることを教へ給ふたことはあります。自ら人に對しても神に對しても未だ曾て自己の不徳を歎息し、又は自己の言語行爲に就て後悔し、赦しを求め給ふたことはありません。のみならず、我常に彼(神)の心に適ふ事を行へり約翰傳八章二十九節と明言し、汝等の中誰か我を罪に定むる者あるか約翰傳八章三十節と公言し、汝の我に委し所の行は我之をなせり約翰傳十章七節と斷言して居らるゝのであります。何と驚くべき言ではありませんか。更に「人の子は地にて罪を赦すの權あり」馬太傳九章六節「汝の罪赦されたり」馬太傳九章二節「その人の子は父の榮光を以てその使等と偕に來らん其時おのくの行に由て報ゆべし」馬太傳十六章二十七節と申されて居ります。私はイエスの言を聞けば聞く程、其大膽に驚かざるを得ないのであります。が彼は其上更に大膽な宣言をなし給ふて居られます。即ち「我を見しものは父(神)を見しなり」約翰



傳十四「父(神)と我とは一なり」約翰傳十と云ふが如きでありまして、世に  
大膽の言と云つて此れほど大膽な言はありますまいと思ひます。此の  
如くイエスは自己に罪がないと自覺して居り給ふたのであります。

(十) イエスの純愛

イエスの意識の中には罪の觀念がないばかりではありません、我と神  
とは一なりと云ふ貴い私共の到底想像も出来ない意識があつたので  
あります。が、翻つて彼の性格を見ますならば又實に麗はしい、慕はしい  
ものがあるのです。彼は「噫、なんぢら禍なるかな、偽善なる學者と  
パリサイの人よ」馬太傳二十と云つてパリサイ人の偽善と傲慢を責つて寸毫  
も假借なさらなかつた直言の人であります。同時に貧しき者を祝し  
路加傳六 病める者を慰め 路加傳五 罪人を勵まし 給ふ 路加傳五 やさしき  
方であつたのであります。彼は繩の鞭を揮ひ、我家は萬國の人の祈禱の  
家と稱へらるべし……然るに汝等は之を盜賊の巢となせり 馬可傳  
十七 と云つて、神殿から奸商等を叩き出すほど恐ろしき權威の人であり



ましたが、同時に小供が其腕に抱かれ、其膝に戯むれるやうな馬可傳十章温和な方であつたのであります。彼は罵られ、嘲られ馬可傳十五章給ひました。けれども罵りもせず、嘲りもせず、却つて其無道を憐れみて涙を流した。けれども路加傳二十三章三十四節給ひました。彼は利慾を超越し、權勢から解脱して居り給ひました。然しさうかと云て遁世脱俗の過ちに陥り給はず、進んで社會教化の爲に骨身をお碎き約翰傳四章三十四節になりました。また其使命を果す爲には熱心であり給ひましたけれども、或人々のやうに憤怒の心からでなく、利慾の念からでなく、全く同情に堪へずして、馬太傳九章三十六節あつたのであります。彼は渾身の愛を凡ての人にお濺ぎになりました。斯の如く其の御一生愚な母の如く溺れ給ふことはありません。涯の跡を一つ々尋ねて見ますならば、全然矛盾した性格が現はれて居ります。けれども恰も東海の表に屹立せる富士山が八面玲瓏人をし

て讚嘆せしめますると等しく、全體から見ますときには不思議にも調和されて、圓滿完全一點の非難する所はありません。即ちイエスの義憤も、温和な心も、寛容な精神も、謙遜な態度も、火の如き同情も、憐憫も、ことごとく皆愛の深き泉から湧出たものであります。換言すれば彼の生涯は愛の顯現でありまして、十字架上の死は實に其頂點であります。絶世の英雄ナポレオンがアレキサンダー・シャールマン・シーザー並に余は強力を以て帝國を創立せしも、獨りナザレのイエスは愛の上に其天國を建立せり。と申して居りますやうに、彼は人に知られ慕はれて、其教は人から人に、村から村に、國から國に潮の如く全世界に押擴がりました。其國の文明の動力となり、政治、教育、道徳を化し、社會を動かし、家庭を潔め、人心を新たにする所の方となりて居る次第であります。が、それは全く彼の純愛の結果であります。



キリストは正義の何者たるを示さんが爲めに來れり、正義のほか功  
を奏すべきものなくキリストの所見即ち其方法及び其秘訣と異な  
れる正義の見解は一切取るに足らざるなり。

マシユー・アーノルド

(十一) イエスの眞實

「イエス大聲に呼はり、エリ、エリ、ラマサバクタニと云ふ、これを譯ば吾神  
わが神何ぞ我を遺たまふ乎と云へるなり」馬可傳十五節は十字架上の言  
であるとしてマコの記して居る所であります。此吾神わが神何ぞ我を  
遺たまふ乎と云ふ言は基督教に反對し、又は基督教に好意を持たぬ人  
人が屢々基督教を批難し、イエスの人格を傷けやうと試みるに引用す  
る所であります。

成程基督教最初の殉教者ステパノにしまして、現在自分を殺しつゝ、  
ある人々の爲めに大聲に呼びひけるは主よ此罪を彼等に負しむる勿  
れ使徒行傳七節と祈りながら死に就て居ります、それから今日まで約二千  
年間幾多殉教者の血は何れも微笑の中に流されて居るのであります。



然るに斯く多くの人々から生命を献げられて居給ふイエスが、しかも在世の當時にありては「なんぢら心に憂ふることなかれ、神を信じ、又われを信すべし」(約翰傳十 四章一節)と云はれたり。汝等世に在ては患難を受ん然ど懼るゝ勿れ、我すでに世に勝り(約翰傳十六 七章)と申されたり。懼るゝ勿れたや、信せよ(馬可傳五章 三六節)と叫んだり。若し我に從はん、欲ふ者は己を棄て、その十字架を負て我に從へ(馬可傳八章 三十四節)と要求したりし給ふて如何にも壯烈な大膽なことを云て居給ふたイエスが、臨終の際に至りて女々しい言葉を發し給ふたと云ふことは如何にも解するに苦む所でありまして、人がイエスを壯言大語して快とする空論家ではあるまいかと疑ふのも決して無理ではありません。

けれども注意せねばならぬことはイエスは所謂東洋流の英雄豪傑とは全く其趣を異にして居給ふと云ふことであります。曾て彼は「是々否

否といへ此より過るは悪より出るなり(馬太傳五章 三十七節)と申されて居りますやうに、何事に對しても頗る眞實で、平たく云へば露骨であり給ふたのであります。今其一二の例を擧ますれば、其弟子等に對して「汝等は我を言て誰とするか」と御問になりますと、ペテロが「汝はキリスト、活神の子なり」と答へました。すると彼は歡び極つたと云ふやうな態度で「ヨナの子シモン、汝は福なり、蓋血肉なんぢに示せるに非ず、天に在す吾父なり」(馬太傳十六章 十 五節)と云ひ給ひました。七十人の弟子が傳道から歸りまして善き報告をイエスにしました時、彼は非常なる歡喜に心を躍らしつゝ、「天地の主なる父よ、此事を智者と達者とに隠して、赤子に顯し給ふを謝す」(路加傳十章 十七 節)と申して居られます。又マルタ、マリアの兄弟ラザロが死にましたので、マルタとマリアは失望し、落膽して泣き悲んで居ました時、イエスは其姉妹等の心に同情を寄せ、又死の偉力に心を働しめ身



ぶるひし涙を流し」約翰傳十一章一節一て泣き給ひました。或時若き宰が永  
 生を嗣ぐためには何を行したらば宜う御座いましやうかどイエスに  
 聞きました。彼は十誠を守るやうにと答へ給ひました。すると宰はそれ  
 なら幼き時から守りて居りますと申しました。其時イエスは宰の無邪  
 氣なのを心から「愛み」馬可傳十章十七節給ふたのであります。エルサレム神  
 殿で牛羊鴿を賣者と兌銀する者が喧々囂々賣買して居るのを見給ふ  
 たイエスは繩で鞭をつくり、義憤の形相嚴然と父の家を貿易の家とす  
 る勿れ」約翰傳十六章十と云て追出し給ひました。斯の如きは其一班であり  
 まして喜怒哀樂色に顯はさないと云ふ流儀とは大分の相違でありま  
 す。斯く云ひますればイエスの人格は奥行のない頗る薄つべらなもの  
 のやうに考へられますが不思議にもそれが自然でありまして少し  
 も其人格を害せぬのであります。

それで「吾神わが神何ぞ我を遣たまふ乎」と云ふイエスの貴き言も動も  
 すれば世間の批難を恐れまして、何かと牽強附會して都合の好いやう  
 に説明せんとする人もあるやうであります。それは最負の引倒しで  
 イエスに取りましては迷惑至極の事であり、私には矢張イエスは十  
 字架上の疾痛慘憺の苦痛と共に何ももの抵抗することの出来ない恐  
 るべき死と云ふ事實の前に立ち給ふての大懊惱大煩悶の間に、思はず  
 口走り給ふた叫びであると思ふのであります。言ひ換へますれば少  
 なくとも其瞬間には今が今まで片時も離れ給はなかつた神から見棄  
 られたと感じ給ふたのであります。光明は消えて一時暗黒となつたの  
 であります。イエスは人間を愛し給ひました。寧ろ熱愛と云た方が適當  
 でありましたやう、そしてそれは同時にイエス自ら生んとし給ふ生命な  
 のであります。人間を熱愛するイエス又大に生んとするイエスが、今其



敵なる死と面を合せ給ふて感慨なきことを得ましやうか、對岸の火災と同様に冷然として看過することが出来ましやうか。大煩悶のあることは寧ろ當然でありまして、何もさういふことはない。云ふならば却つてそれはイエスを偽善者とするのであります。御覽なさい。イエスの人格には一毫の虚偽もありません。従つて其生涯は實に玲瓏玉の如くで一の偽善も發見せられぬではありませんか。然らば臨終の際になりて人を欺き、世を詐るやうなことがあらうとは決して思はれません。それ故に彼の口から叫ばれました。吾神わが神何ぞ我を遺たまふ乎。云ふ言は却つて其生活の眞實に裏書をしたものであります。従つて其人格に燦爛たる光輝を添へ、彼の價値をして更に大ならしめたものと云ふことが出来ます。

キリストの高き何れの度にあるか之を如何やうに確定するも、また我れ人のその本性を知らざるが如くキリストの本性をも知らざるにせよ、其神と人との關係して特別の地位を占め、神の榮光及び世の救のために、その特有せる事業を爲すに適したるは言語と行狀とに由りて十分明白なりとす。



(十二) イエスの沈黙

イエスの生活には間々驚くやうな反対なことがありまして、これでも同一人であらうかと思ふことがあります。彼の多辯と沈黙は即ち其一つでありませう。

イエス三年間の活動は實に目覺しきもので普通の人の十年も其上も活動に比べる事が出来ます。而して其活動は彼の人格を通して顯はれた行爲と教訓との二つでありまして、其行爲と教訓とは何れが甲何れが乙と區別さるべき筋のものではありません。が行爲のことは暫らく措て教訓に就て考へて見ますならば、ヨルダンの清流に於てヨハネからバプテスマを受け給ふて後、四十日の野の試惑を経、それからガリラヤに行き給ふて時は満り神の國は近づけり、汝等悔改めて福音を

信せよ馬可傳一章十五節 どの一大獅子吼を初めとしてガリラヤ湖邊、説教山の中腹、エルサレム神殿其他彼の足跡の印せられた所では、或は巧妙なる譬喩を以て、或は剴切なる寓話を以て、或は實際的の教訓を以て、時には峻烈骨を刺すやうな春秋的の口調を以て語り給ふた事は、四福音書に記されて居る通りであります。ヨハネが「イエスの爲し、事は此等の外に許多あり、若しこれを一々々るしなば、其書この世に載盡すこと能はじと意ふなり」約翰傳二十一章二十五節と云て居りますやうに、勿論此外に記されず、に忘れられました金玉の言が、何程ありますか、それは大したもの、に相違ありません。それでイエスの多辯は、饒舌と云た方が寧ろ適當ではなにかごさへ思はれるのであります。

機會がありましたら必ず語り、語り給ふた以上は如何にしても説き伏せねば止み給はなかつたと云ふ程の饒舌のイエスは、ゲツセマネの



園で學者や長老等の手に捕へられ給ふてから、カヤバの法廷に立たせられ、ピラトの前に曳き出され、ヘロデの審問を受け給ふたのであります。其間實に六時間に渡り、色々虚偽の證據を持出したり、申立てをしたり、あらゆる悪辣の手段を施しましてイエスを陥入れんとしましたが、彼は平素の饒舌にも似給はず全く口を噤んで何にも語り給ひませんでした。それで聖書には「イエス黙然として何も答へざりき」(馬可傳十四「ピラトの奇とするまでイエス何をも答へざりき」五章五節)と記されて居ります。

イエスの法廷に於る沈黙は實に不思議でありまして、人々が奇怪に思ひましたのは尤ものことであります。けれども汝は頌べき者の子キリストなる乎(馬可傳十四)との間に對しては、忽ち今までの沈黙を破り、嚴然たる態度で然り人の子大權の右に坐し天の雲の中に現はれ來るを汝

等みるべし(馬可傳十四)と一大雄辯を揮ふて學者や長老等の心膽を寒からしめ給ひました。私共は此にイエスの多辯と沈黙の理由を發見すると共に、此反對矛盾せる性格の調和を見出すことが出来ると思ひます。即ち無用のことには口を噤んで黙し、必要缺くべからざる時には饒舌と思はるゝ程多辯であり給ふたのであります。傳道書に曰く「天が下の萬の事には期あり萬の事務には時あり生るゝに時あり、死るに時あり、植るに時あり、植たる者を抜に時あり……黙すに時あり、語るに時あり、愛しむに時あり、惡むに時あり、戦ふに時あり、和ぐに時あり」(三章一と蓋し)イエスは沈黙の時と饒舌の時とを心得て居給ひました。



實にキリストはいまもなほ生命なりけり道なりき此れや天つまこ  
 の光なり此れやまことの生命なり此れやまことの道なりき深く  
 ものぞみ厚くも祈るものごもは其與へぬる光さ生命の道をたつき  
 に忍ぶなり之を便に忍ぶなり。

パール

キリストに就ては一つとして我を驚かさざるものなし其精神はわ  
 れを畏服し其意志は我をして爲す所を知らざらしむ。

ナホレオン

### (十三) イエスの勤勞

昔は世界何れの國にありましても人に上下尊卑の別を附しました即  
 ちギリシヤでは政治などにたづさはる公民を大に尊び、労働は低き職  
 業であるとして卑み且之を奴隸に一任したのであります我國に於て  
 も武士は尊く農工商は卑しきものとされた時代がありました。けれど  
 も現今は職業に尊卑があるのではなく、それに従事する人が之を尊く  
 もし、卑しくもするのであると云ふ考へに變つて來たのであります。而  
 して此の如く職業を重大視し職業に價値を附與したものは實にイエ  
 スにあると云ふに至りては驚かざるを得ないでありましたやう。

(一) 然らばイエスは如何に勤勞を教へ給ふたかと云ふに貴人の譬喩  
 にある貴者みづから領地を受て歸らんとて遠國へ往るとき、十人の僕を



召て彼等に金十斤を與へて曰けるは我來るまで商賣せよその國民か  
れを憾みて後より使を遣し曰けるは我等この人を王とする事を欲ま  
す領地を受て歸りし時おのゝ商賣して幾何の利を得たるかを知ら  
んとて金を與へおきたる僕等を召と命じぬ初の一人きたりて曰ける  
は主よ汝の一斤は十斤の利を得たり主人いひけるは愈善僕よ汝は少  
者に忠なれば十の邑を宰ざるべし又次の一人きたりて曰けるは主よ  
汝の一斤は五斤の利を得たり主人曰けるは汝も五の邑を宰ざるべし  
又一人きたりて曰けるは主よ汝の一斤は此に在われ手巾に裏て藏置  
たりき蓋なんぢ嚴人なるが故に我おそれたり汝置かざる者をとり播  
ざる者をかる人なればなり主人いひけるは惡僕よ我なんぢの口に因  
て汝を鞠べし汝われは嚴人にて置ざる者を取まかざる者を穫と知る  
然るに何ぞ我來るとき本と利を得んが爲に我金を兌銀肆に預ざりし

や遂に傍らに立る者に曰けるは此人の一斤を取十斤を有る者に與へ  
よ衆人主人に曰けるは主よ其人すでに十斤を有り主人いひけるは我  
なんぢらに告んそれ有者は與へられ不有者は其所有ものまで取るべ  
し且わが敵すなはち我支配を欲ざる者を此に曳來りて我前に誅せ加  
節十九章十二節とありますこれは譬喩を以て人の勤勞の決して忽諸にす  
ることの出来ないものであると云ふことゝ同時に勤勞を怠るものゝ  
受べき責罰の大なる所以を説き給ふたのでありますゼベダイの子の  
ヤコブとヨハネがイエスの許に至りて先生の大成成就の曉には我等  
の一人を其右に一人を其左に坐せしめよと願つたことがありますが  
其際イエスはヤコブとヨハネの誤れる考へを正した後十二人の弟子  
を呼集めて異邦人の君と見る者は其民を治め又大なる者どもは彼等  
の上に權を執るこれ汝等が知る所なり然ぞ汝等の中にては然すべか



らす汝等のうち大ならんと欲ふ者は汝等に役るゝ者とならん、又汝等のうち首たらんと欲ふ者は凡の人の僕とならん、蓋人の子の來るも人を役ふ爲に非ず、反て人に役はれ且おほくの人に代その命を與て贖とならん爲なり、馬可傳十章三十三節と教へ給ひました。これは勿論弟子に對する教訓であります、又當時の誤れる考へを一掃して勤勞に對する新意義即ち犧牲的勤勞を示し給ふたものと見ることが出來ます。イエスが十二人の弟子を伴ふて道を行き給ふ時に生來の瞽に逢ひ給ひました。弟子は一つには好奇の心からと、一つには年來の疑問を解決しやうと欲する心から「ラビ此人の瞽に生れしは誰の罪なるや己に由か、又二親に由か」とイエスに問ねました、其時イエスは此人の罪にもあらず亦二親の罪にもあらず彼に因て神の作爲の顯はれん爲めなり」と答へて更に晝の間は我かならず我を遣はしゝ者の行をなすべきなり、夜來ら

ん其とき誰も其行をなすこと能はず、一節、四節と教へ給ふたのであります。これは「我父は今に至るまで働き給ふ我も亦働くなり」と云ふイエスの言と同じ意味でありまして、彼の勤勞に對する熱心忠實の精神を明示し、而して其勤勞は一時的又發作的のものでなくして、精勵的、永遠的のものであることを表明して居ります。イエスは曾て「人の子は喪ひし者を尋て救はん爲に來り」路加傳十章と云ひ給ひました、が申すまでもなく、救はれた者は其殘る生涯を神の御爲になすべきものであります。それでイエスは「父の榮の子に因て顯はれんが爲なり」と云ふ、と云て自己の使命——畢竟人の使命——は自己の勤勞を以て神の榮を顯はすにありと斷じ給ひました。これは實に犧牲的勤勞も、沒我的勤勞も結局は神の御爲めである、と云ふことを教へ給ふたのに外なりません。



(二) 教訓は其人の人格を通して活るものとなります。如何に完全な善美な教訓でありましても、それに人格が伴ひませんならば決して人を活しません。イエスの勤勞に對する教訓が今日世界の人々を指導し、動かして居ると云ふのは一にイエスの人格の力でありまします。然らば勤勞者としてのイエスは如何と申しますに所謂静默の三十年は静なる、しかも美しきナザレの小邑に住み給ひ、木匠の子として父の業を繼ぎ、日村民の家具を造り、農具を製し、其他の工事に従事して非常なる勤勞の生活をなし給ふたであらうと思はれます。これは公生涯のあの激烈に繁忙な三年の間、一回たりとも病氣に罹り給ひしことのなきほど健康な身體を持ち給ひしに見て知ることが出来ます。而してイエスは一旦自己の使命のある所を知り、仕事着を脱し、鋸と鎚とを捨て、蹶然として起ち給ひます。或るや、ゴルゴタ山頭十字架の上で、事畢りぬ。章約傳十九と

云て首を俛れ、其靈を神に付し給ひます。までの三年間は、ペテロが申して居りますやうに「イエスは神より聖靈と才能を以て膏を沃がれ、周遊りて善事を行ひ、使徒行傳十章三十八節給ふて殆ど寧日もなく勤勞を續け給ふたのであります。即ちその聲名あまねくスリヤに播りしかば、人々すべての患める者萬殊の病また痛惱る者あるひは鬼に憑れたるもの、癩癩癩瘋に罹れる者を彼に携來りければ之を醫せり、馬太傳四章二四節あるやうに人々の身體の病精神の疾を癒し給ひました。又説教の爲に奔走なさいました。こゝは「イエス遍く都邑を廻りその會堂にて教をなし、天國の福音を宣傳へ、馬可傳九章、イエス其十二弟子に示畢し、とき此處をさり道を教へ、廣めんが爲に彼等の諸邑に往けり、馬太傳十章一節とあるに依りて知ることが出来ます。而して「イエスこれを聞き人をさけ舟に乗て其所を去さびしき所に往給ひしが衆人きいて歩行にて彼に従へり、馬太傳十四章十三節、馬可傳六章十



三十一「イエス之を知りて此を去りしに多くの人々これに従ふ」馬太傳十二  
 一節「イエス此等の事を言畢りしときガリラヤを去りヨルダンの外ユダヤ  
 の境に至りけるに多くの人々従ひしかば」馬太傳十九とありまして、イエ  
 スは静に休養をさへなし給ふことが出来ずにガリラヤを渡る舟の上  
 で僅に一睡を貪り「馬可傳四章三十一節給ふが如き有様でありましたのみな  
 らず多くの人々來り集りければ食する暇もなかりき」馬可傳三「イエス  
 彼等に曰けるは汝等衆人を避て我と偕に暫く寂寞しき處に往て休む  
 べし是れ往來の者多くして食する暇も無ししが故なり」馬可傳六章とあ  
 りますやうにイエスは食すべき時をだに有ち給はなかつたのであり  
 ます。簡單でありますが此等に依てイエスが其生涯を通じて如何に勤  
 勞をし活動をなし給ふたかを推察することが出来ましやう。イエスが  
 サマリヤのスカルの井戸の邊りで十二人の弟子に對し「我を遣はし、

者の旨に隨ひ其工を成畢る是わが糧なり」約翰傳四章と云ひ給ひました  
 やうに勤勞は實にイエスの生命であつたのであります。

キリストの口に教へ身に行ひたる道徳は最も仁愛なる種類に屬せ  
 り數年前孔子及びギリシヤの哲人等の之を説きまた其後に至り  
 許多の善人ありて世々之を教へたれど未だキリストに過るものあ  
 るを見ず。

トマス・ペイン



私が或人を訪問しましたら、其妻君は主人に向ひ「牧師さん云ふから頭髪をむしやくしやにし、頬鬚が眞つ黒で、服は僧服の人と思つて居ましたのに、彼の牧師さんは随分開けたハイカラね」と云たと云ふことを聞きました。これは極めて卑近な例であります。世間の一部にイエスの教を隠遁的なものと思ひ、信者は何れも仙人のやうになるものであると云ふやうに考へて居るものがある。云ふことを證據立て、居ります。それで基督教の開祖であるイエスと云ふ男も何れ世外人であらうと想像して居る人が多い次第なのであります。けれどもイエスは決して隠遁的な人でもなければ、又厭世の方でもありません。それに就て最も能き證明はイエスの教敵となりて常に彼

(十四) イエスの社交

のあげ足どりに腐心をして居ましたパリサイ派の人々や教法師などが彼に就て申しました言であります。それをイエスは「バツラスマのヨハネ來りてパンをも食はず酒をも飲まざれば悪鬼に憑れたる者なり」と汝等いへり、人の子來りて食ふ事をし、飲ことをすればまた食を嗜み酒を好むの人、税吏罪ある人の友なり」と汝等いへり路加傳十七章と申されて居ります。これに依りますと當時の人々はイエスを食ふ事をし、飲むことを爲す人とし、又食を嗜み酒を好む人と致して居つたことが判明ります。言ひ換へますれば彼は當時の人々からは、度を過すほど社交的であり、享樂主義者である。と認められて居給ひました。實際イエスは人生に取りまして有益無害な社交や娛樂と云ふものを退け給はなかつたのであります。今少し左に述べて見ましやう。

(一) イエスは傳道に従事し給ふ初めに當りまして、カナに於る親戚の



家の婚筵に招かれ、新參の弟子と一緒に列席し給ひました。そればかりではなく、葡萄酒の不足を告げましたので、水を葡萄酒に變へ給ふた。約  
 傳二章一節 一節 記してあります。葡萄酒が盡ると云ふのは、婚筵に取りま  
 て不面目此上もなきことであり、然るにイエスが水を葡萄酒に變  
 へて彼等の興を助け、樂みを加へ給ふたと申しますのは、管に彼が社交  
 の人であつたと云ふばかりでなく、同時に如何に之を重んじ給ふたか  
 と云ふことが知られます。一日、稅吏のマタイがイエスの弟子となりま  
 したので、其同僚や世間から罪人と稱せられて居る人々を招きまして  
 告別の會を開きました。其際イエスも御出席になりました。それで學者  
 やパリサイ人等は口を極めて罵りました。けれども彼は「わが來りしは  
 義人を召くために非ず、罪ある人を召きて悔改めさせんが爲なり。」  
 傳二章十五節 一節 云ひ給ふて、マタイの宴會を賑はし、稅吏や罪ある人々と共

に樂み給ひました。或時イエスは「ザアカイよ、速ぎ下れ。我今日かならず  
 汝の家に宿らん。」  
 路加傳十章九節 五節 云ひ給ひまして、自ら進んで稅吏ザアカイ  
 の家の客となり、ザアカイを慰め、勵まし給ひました。又イエスの爲には  
 教敵なるパリサイ人が共に食せんことを請へば喜んで、其賓客となり  
 給ふのみならず、偶々饗すに敬を以てせず、交はるに禮を缺ぐとありて、  
 社交に禮讓の必要であることを説き給ひました。  
 路加傳七章三十一節 三十一節 云ひ給ふたのであり、  
 ベタニヤのマリア、マルタの家へ出入し給ひしことは、著しきことであ  
 ります。路加傳十章二十節 二十節 斯の如き寂しき家庭を賑はし給ふことは、一  
 使命と感じて居給ふたのであります。彼は實に都鄙の別なく、何所に  
 ても行て人と語り、富める人と貧しき者の差なく、これを訪れ、祝節と弔  
 祭の區別なく、必ず出席して、其人々と共に喜び、又悲み給ふたのであり  
 ます。



(二) イエスは曾て「凡て食ふ者をして死ざらしむる者は天より降れるパンなり、我は天より降りし生るパンなり、若し此パンを食はば窮りなく生べし、我與ふるパンは我肉なり、世の生命の爲に我これを與へん」約六章五節云ひ給ひました。勿論これは靈的の事でありませんが、イエスが如何に人生と極めて密接な交渉を有して居給ふたかと云ふことは言外に溢れて居ります。斯の如き次第でありますから彼の教訓なり、譬喩なりは何れも社交的のことであります。人々が祝福をして頂きたいと思ひまして嬰兒をイエスの許に伴れて來ました時、弟子等は喧しいと云て拒みました、けれども彼は或は抱き、或は膝に乗せなどして暫時の間、共に楽しく遊び給ひました、そして「嬰兒の如くに國を承ざる者は天國に入こことを得ざるなり」馬可傳十章十と云ひ給ひました。イエスの天國觀が如何に楽しい、賑やかなものであるか、知られましやう。其外

「婚筵の譬喩」馬可傳二十二節にしろ「悪き農夫」馬可傳十二章十節の十人の童女馬太傳二三節の譬喩にしろ何れも人事を借りて語り給ふたのであります。それだけイエスは人生に興味を有ち、人生を樂み給ふたと云ふことを知ることが出來ます。更に特記すべきことはイエスが夫婦の關係を教へ、家族の制を以て神聖のものとなし給ふたことでもあります。馬可傳十章イエスは實に何人よりも多く人生を愛し給ひました。イエスは斯の如く人の中にありて、世の中に交りて、否自ら進んで行て教を垂れ、救の事業をなし給ひました。イエスの教が個人を福し、家庭を和樂親睦にし、社會を奮闘的にするのは一に其社交的精神に存するのであります。



曾て世に現はれたる人の最も善きものは受難者にして溫柔、忍耐、謙遜、静安の精神を有するものなりき、世に活動せるものうちにて最  
初トマス、デツケルの真正なる紳士は即ち此人にあらずして誰ぞや。

此れ理想上の人性を改良せるものうちにて於て第一等の地位に立  
てるものにして我等が思想の及ぶことを得る宗教上最高の模範な  
り、凡そ完全なる敬虔はキリスト心内に臨み居らざれば成就し難き  
ことなり。  
ストラウス

(十五) イエスの信仰

或日幾人かの母等が各自の孩提を携て來ました、それはイエスから祝  
福をして頂きたいからであります所が弟子等は孩提が泣たり騒いだ  
りするのを五月蠅思ひまして責めました。イエスは弟子等の無情な處  
置に激して「孩提を我に來らせよ彼等を禁むる勿れ神の國に居るもの  
は斯の如き者なり」と告げ、更に「誠に我なんぢらに告ん凡そ孩提の如く  
に神の國を承ざる者は之に入ることを得ざるなり」馬可傳十章十四節と云ひ給  
ひました。イエスの人情の濃厚な、そして美はしさが偲ばれるではあり  
ませんか。それは兎も角としまして「孩提の如くに神の國を承ざる者は  
之に入ることを得ざるなり」と云ふイエスの一言は、やがてイエスの信  
仰其ものを示して居ります。



信仰と申しますと動もすれば教訓とか誡律とかを信することのやうに解釋せられたり、又は神の働きや恩寵やを信するのであると説明されたり致します。けれどもイエスの信仰はそれらの事を信することよりも神を、まかも愛の神、父の神として信するにあるのであります。一人の子供が真夜中に眼を覺して水を求めますので、お父さんがコップに一杯與へました。部屋は眞暗であります。子供は一二回寢返りして居ました。が、怖くなつたのか突然お父さんと叫びました。それでお父さんの顔はお前の方に向いて居るよと答へますと、やがてすやくと寢てしまつたと云ふ話を聞きました。が、實にイエスの信仰は絶対の信頼で此話の中の子供が父に於るよりも更に深き意味に於て神の懷に抱かれて居給ふたのであります。それでイエスの生涯を通して不平と云ふものがなく、失望と申すものを發見することが出来ません。却つて

人民に棄られ、家族に見放され、弟子等に去られんとする不遇の極點に達し給ふた時に於てすらも、我獨をるに非ず、父われと偕に在なり。約翰十六章三節と稱して動じ給ひませんでした。イエスの信仰が絶対の信頼であると云ふことは右の次第であります。が、更に私共に對し給ふ絶対の信仰の要求に見て一層明瞭致します。然らばイエスは如何やうに私共に信仰を要求し給ふかと申しますと、大略次の如くであります。

一、今も昔も等しく私共を苦慮せしめるものは衣食住即ち生活問題であります。此生活問題は屢々私共をして盲目とならしめます。即ち日夜生活問題の爲に奔走苦慮します結果、神に對する奉仕のことを忘れしめるのであります。イエスは當時の人々が全然此過ちに陥つて居るのを看破し給ふて、天空の鳥を見よ、稼ごとなし、穡ごともせず倉に蓄ふる



こどもしない、又野の百合花は如何にして長つかを思へ、勞めず、紡がな  
 いではないか、それでも鳥は立派に生き、百合花は見事に育つて居るで  
 はないか、果して然らば何を食ひ何を飲み何を衣んとて思ひわづらう  
 必要は斷じてない、それよりも汝等先づ神の國と其義とを求めよ、然ら  
 ば此等のものは皆なんぢらに加へらるべし、此故に明日の事を憂慮な  
 かれ、明日は明日の事を思ひわづらへ一日の苦勞は一日にて足れり」太  
 傳六章三十三、三十四節と云ひ給ひました。何と驚くべき要求ではありませ  
 んか。茲かも此言の中にイエス御自身の確固不動の信仰が躍如として活現して居  
 るのが明かに見られます。  
 二、人の最も口に云ひ易くして實際に臨んで甚だしく恐るゝもの死の  
 如きはありますまい。ペテロは「我は主イエス」と偕に死るゝもの死を知ら  
 ずと言はじ」馬太傳二十六章三十五節と公言しましたが、カヤバの庭の中で婢僕等か

ら君もイエスの弟子であらうと云はれて誓て我その人を知らず」馬太  
 十六章七十四節と申して居ります。ペテロの如き剛膽の人すら既に然りとすれ  
 ば他は推して知ることが出来まじやう、或日イエスは十二人の弟子と  
 共にガリラヤの湖を航行し給ひました。然るに突然颶風が起りまして  
 浪は荒れ、船は覆へらんと致しました。それで弟子等は恐怖の爲め周章  
 狼狽なす所を知らず、折角連日の疲勞を休めやうとして熟睡して居給  
 ふイエスを揺り起し、我等が溺るゝをも顧み給はざるかと半ば怨嗟的  
 に半ば嘆願的に申しました。然るにイエスは起て風と海とに静りて穩  
 かななれと命じ、さて弟子等に向つて何故かく懼るゝや、汝等なんぞ信  
 なきや」馬太傳四章二十一節と一喝し給ふたのであります。畢竟絶對の信仰を有し  
 給ふイエスには生死の差はありません。寧ろ生死を超越して居給ふの  
 と、神の愛を信じ給ふ所から恐怖などは更にないのであります。是れ弟



子等の周章狼狽の醜態を攻撃して絶対の信仰を有つやう要求し給ひたる所以であります。生死の岸頭に立ちて之を支配し給ふイエスの偉風何と堂々たるものではありませんか。  
三、果斷決行と云ふことは實に立派なことでありますが、偕てそれを實行する人は稀であります。何故かと申しますれば彼のヤコブが疑ふ者は風に撼されて翻へる海の浪の如し、斯の如き人は主より何物をも受ると想ふ勿れ、斯の如き人は二心にして其行ふ所の事すべて定準なし一章六節と云て居りますやうに全く確固不動の信仰がないからであります。そこでイエスは「信仰ありて疑はずば……此山に命じ此より移されて海に入よと云ふとも亦成ん馬太傳二十一章と云ひ「凡そ祈り求むる所のもの已に得たりと信せば必ず得べし」馬可傳十一と申されました。イエスが其友ラザロの死後四日目を甦らせん爲に其姉妹等を携て

墓場に行き給ひました時、堪へ難き臭氣をも意とし給はず屍の前に立ち天を仰いで「父よ已に我に聴けり我之を汝に感謝す」約翰傳十一と祈り給ひましたのも又身は十字架上の露と消る果敢ない運命に陥つて居るにも拘らず、百千年の將來を豫想して「我已に世に勝てり」約翰傳十六と絶叫し給ふたのも、畢竟此信仰の結果であります。故にイエスは私共に對して父なる愛の神を信せよ、絶対に信賴せよと要求し給ふのであります。未だ得ざるものを既に得たりと信仰し、與へられて居なくても已に與へられたと信仰せよと申しますのは一見逆説のやうであります。すが、これやがて絶対の信仰であるのであります。  
ヘブライ書の記者が「それ信仰は望む所を疑はず未だ見ざる所を憑據とするものなり」一章と申して居りますが、イエスは此言の活た證明と云つても差支はありますまい。



## (十六) イエスの祈禱

イエスの社交を記しました時に申しましたやうに食を嗜み酒を好む人と評せられ給ふほどイエスは社交的人でありました。然しそれは其半面でありまして他の半面には隠者ではあるまいか、世を避け人を厭ふて居給ふたのではあるまいかと思はれる點があります。それは即ち彼の祈禱に於て最も能く示されて居ります。新約聖書はイエスの公生涯を傳へまして、祈禱に關する記事十一を記して居ります。勿論十一と云ふ數は決して多數ではありませんが、イエスの公生涯が全部聖書に記されてありませんで、其重なるものでありますやうに、十一の祈禱も恐らくは代表的のものであります。此外に記載されて居りませぬもの、弟子等の知りませぬものも多くあ

つたらうと信じます。今其一例を擧げて證明しますれば、希伯來書の記者は「彼(イエス)肉體に在りし時、哀み哭き涙を流して死より己を救ひ得るものに祈り、又懇求をなし、其敬虔に由りて聽かるゝことを得たり」(五章と記して居りますが、イエスの祈禱に對する態度が髣髴として見ゆるやうであります。又ヨハネはイエスがラザロを復活らしめ給ふ際の祈禱を記して「父よ既に我に聽けり、我を汝に謝す、我汝が恒に我に聽くことを知る」(十一章四と書て居ります。此等の言に依りまして察しまするにイエスの生涯は一面祈禱の生涯であつたことが判明します。従つて彼が隠者ではなかつたかこの疑ひは此處から發せられると云ふことが知れます。同時に、彼は斷じて所謂隠者ではあり給はなかつたと云ふことも知れます。イエスは祈禱の生涯を送り給ひました。そして其祈禱をなし給ふ場合



は夜間か日出前でありまして村を離れ、家に遠ざかり寂しき所に行き給ふのが常でありました例之「イエス早く起き人なき所にゆき其所にて祈禱せり」馬可傳一章三十五節「イエス常に人なき所に退き祈り給ひき」路加傳五章二十六節「祈せんとして山に上り日くれて獨りそこに在せり」馬太傳十四章二十三節「イエス祈の爲に山に行き終夜神に祈れり」路加傳六章十二節「味爽に……祈禱せり」馬可傳一章三十五節と記されてあります。蓋し所の静寂であるのは海濱と山野であります。時の静寂でありますのは夜間と味爽であります。イエスが静なる山野海濱を選びて祈禱し、夜間と味爽とに於て神に接し給ふたのは決して世を厭ひ、人を避る隠遁ではありません。曾て彼は祈禱に就て祈る時は嚴密なる室に入り戸を閉ちて隠微たるに在す汝の父に祈れ、然らば隱微たるに鑒たまふ汝の父は明顯に報いたまふべし」馬太傳六章六節と教へ給ひましたが、彼に取りましても最も祈禱に適する場所、時間即

ち嚴密なる室は山野と海濱、夜間と味爽とであつたのであります。マルチン、ルーテルは何事も神に祈る人なりと人に嘲けられました。ジョンは説教しながら常に主よ我を教へ、又此聴衆を教へ給へと祈りました。ジョン、ウエスレーは日々斷へず祈りました。此等の人々は何れも其事業を祈禱の力で遂行したのであります。元來祈禱と事業とは極めて密接な關係を有して居りまして、事業の成就是祈禱の結果に外ならぬのであります。イエスは其よき模範であります。然らば彼は如何なる場合に祈禱をなし給ふたかと申しまするに、ストーリーカーが指摘して居りますやうに、先づ

第一は重大事件を處理する際であります。聖書に當時イエス祈禱の爲に山に往て終夜神に祈れり、夜明てイエス弟子を呼びその中より十二



人を選びて之を使徒と稱く路加傳六章三節とありますが十二人の弟子の善悪はイエスの事業の成功と否とに關する一大事でありまして實に容易ならぬことであります。それで彼は終夜祈禱し給ひし譯であります。斯の如く彼は己が力に餘るやうな大事に際して祈禱し給ふのが常であります。

第二は多事多忙にして心を過勞せる場合であります。イエスの公生涯は非常に多忙でありまして、飲食の暇さへなかつたやうな有様であります。然るにイエスは斯かる時には殊更祈禱の爲めに長き時間を費し給ひました。聖書に「イエスの聞えます」揚りて許多の人々或は教を聽かんとし或は病を癒されんとて集り來れり、イエス常に人なき所に退きて祈りたまひき路加傳五章十六節とあります。

第三は試惑に逢はんとする時であります。其例としましてはゲツセマ

ネの園に於るイエスの祈禱を示しますれば直ちに了解が出来ましたや馬可傳十四章三節即ちイエスは十字架上の磔死の外に救の道もあらばと神に訴へ給ひました。心いたく憂へて死るばかりの思ひをして祈禱り給ひました。

生を此世に享た私共は世を厭ひ人を避けて隱者の生活をなすことは無用であります。却つてイエスに倣ひ、其境遇に従ひまして大に社交を勧めねばなりません。それと同時に彼が何處までも祈禱の人であり給ふたやうに、私共は又靜かに山野か海濱かを選び夜間か味爽かに於て常に神に接し、神に祈禱らねばなりません。萬一それが出来ぬ境遇の人は機械のきしる音の騷擾しき工場や、罵聲嘲音喧しき市場に於て、靜かに祈禱る習慣を作ることが大切であります。



後世如何なる奇絶のこゝろありて世を驚かすもイエスに勝ることあるべからず之を禮拜することは斷る時なくして益や少壯ならんこと其傳説は永く涙を催さしむるの力あり其苦痛は最も高尚なる心情を融すならん人の子のうちに未だ曾てイエスより大なるもの生れざりきとは蓋し萬世の公言するところなるべし。

レナーン

不 許 複 製

大正四年三月十七日印刷  
大正四年三月二十二日發行

【定價貳拾錢】

著者	牧田忠藏
發行者	東京市京橋區築地明石町八番地 イー・エス・ウツーン
發行所	日本基督教興文協會 横濱市太田町五丁目八十七番地
印刷者	村岡平吉
印刷所	東京市京橋區銀座四丁目一番地 福音印刷合資會社東京支店
發賣所	警文社 福音書館 基督教會



976
128



終

